
ある幽白FFに影響されて

ルーラ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ある幽白FFに影響されて

【Nコード】

N2240F

【作者名】

ルーラ

【あらすじ】

風とは「OBLAAT」というサイトにある「Beyond the etime」と言う小説に出てくるオリキャラです。作者様の了解を得て使用させて頂きました。それ以外の師匠達はルーラオリジナルキャラです。

風の娘（珠南&凧&氷連）（前書き）

風の生い立ちと、凧の人生に深く関わる師匠達との一コマです。

風の娘（珠南＆凧＆氷連）

凧は静かで深い森を駆け抜ける風から生まれた。

場所は樹齢何千年も経ち特別に意思を持った

この辺り一帯の主である巨大な魔界樹の根元。

生まれたばかりの彼女に自我はなく、

幼児の形態をとってはいたが泣きもせず、怒りもせず、

ただその場に座っているだけの存在だった。

だが魔界樹である『彼女』が凧の親、かつ優秀な先生代わりとなつて凧を育てた。

凧と言う名を与えたのも彼女。生きるために水を飲むよう最初に教えたのも彼女。

彼女の声はいつも凧の頭の中に優しく響いて来たから、

幼くても彼女の言葉は理解出来たのだ。

無理に言葉を発する必要が無かったのだが、歌う時は違った。

凧は魔界樹の幹に耳を押し付け、森や木や、

大地のリズムを感じながら歌うのが好きだった。

彼女は次に自分達種族のことを教えてくれた。

何百年、あるいは何千年もかけて火なら火の、水なら水の、

そして風なら風の気が集まり具現化し実体を得た存在。

そして凧を生み出したのは風だ。

凧は無意識の内に風の声を聞き自由に操る能力を備えていたが、

自分を生んだのは風なのだという魔界樹の言葉がまだ今一つ飲み込

めていなかった。

こんな形のないものがどうして？私はちゃんと身体があるもの。

大抵のものが自分の生まれた瞬間を覚えていないように、

凧は風から生まれたのだと言う事を全くと言っていいほど無自覚だった。

魔界樹にその疑問を伝えた時、

要するに風そのものとはまた別のものなのだと教えられてやっと納得した。

自分は風であって風では無いのだ。

次に、魔界樹は広大な魔界の中で同族に会うことはまず無いと言っていると言った。

だがその事に対して別段寂しさなどは感じない。

滅多に会えない同族よりも、

自分を大切に慈しんでくれる魔界樹が側にいるのだから尚更だ。

自分の種族が妖怪の間で高い商品価値があることを

魔界樹から聞いて知ってはいたが、

それまでは森や暗い空ぐらいいしか見た事がなかったので

何の心配もしていなかった。

凧が少し成長して風をまとして飛ぶ事が出来るようになった頃、

魔界樹は自分の縄張りの外に出ないよう注意し始めた。

その頃どうやって凧の存在を知ったのか、

度々ハンター達が森にやってくるようになっていたからだ。

「安心して、母様。私どこにも行かないわ。」

魔界樹にすがりながら言う。言葉を十分に紡ぐことが出来るようになっていた。

「それに、いつも母様達を守ってくれるじゃない。」

彼女の縄張りにいる限り凧の頭の中には彼女の声が響き、

危険があれば知らせてくれたうえ

縄張りの中の木々たちに頼めばいつでも姿を隠してくれたので。

実際ハンター達がいくら血眼になって私を探しても、

魔界樹の魔力により枝や幹と同化している凧を見つけ出す事はまず不可能だった。

だが、ある時いつもやって来るタイプとは全然違うタイプの連中が来た。

そのうちの一人は獲物の思念を感知する事が出来る特殊な能力を持

つ男だった。

縄張りの外まで追い詰められて捕らえられ、鎖で繋がれた上に特殊な呪をかけられた。

術をかけた者に人形のように操られる呪を。その際に森は焼かれた。恐怖で薄れ行く意識の中で母なる森の、声無き悲鳴を聞いていた。だが、その時既に私は自分の力で目を閉じる事が出来なかった。

それから事はよく覚えていない。

ただ、ゆっくり身体が、そして心が歪まれていく様な感覚だけがあった・・

数年経ち、彼らが辺りの妖怪を次々と従わせ巨大な一勢力となつて来た頃、

魔忍の里に彼らを打破して欲しいとの依頼が来た。

その依頼を遂行するよう、

里にいる全ての忍達を束ねる長から指示されたのは

珠南と氷連と言う名前の二人の忍。

珠南は風を操る風使い。

風になびく程度の長さの夜空のような黒い髪、

同色の黒曜石のような瞳、整った顔で牡牛のような角を持っている。

背は高く鍛え抜かれた身体をしている。

氷連は呪により氷を操る呪氷使い。

冴え冴えとした鬘のような青い髪に同色の澄んだ冷たい瞳、

端正な顔で珠南より少し背が高くがっしりした体格をしている。

珠南同様彼の身体に贅肉と言うものはない。

二人は精鋭集う魔忍の中で共に四強の一角と謳われていた。

そしてこの二人はお互いよき相棒で、行動を共にすることが多かった。

敵地に入り込んだ二人は二手に分かれ、

敵対する連中を次々と蹂躪していき造作なく集落の奥までたどり着

いた。

いくら勢力を増した集団とは言え、

この二人にとっては何の危険視するほどの連中ではなかったのだ。そして。

いったん合流した二人が首領である男のもとにたどり着いた時、そこには黒づくめの服に覆面をしたひどく背の低い妖怪と、部屋の隅に隠れようとしている男が一人。

突然黒い服を着た方から恐ろしいほどの風が放出された。

「なるほど、お前が・・・」

珠南がぼそつと呟く。

今までの連中よりは骨があるだろう。だが、自分達にとっては赤子同然だ。

二人とも一応かまえて距離をとる。

「氷連、こいつは俺がやる。あつちはお前に任せる。」

氷連は少し意外そうな顔をしたが一つ頷き、

了解の意を伝えると逃げようとしている首領の方を向く。

黒い服のそいつが手をかざす。

と、避けるように少し動いた珠南の側をヒュン！

と刃状の風が通って行き背後の壁が崩れ落ちた。

中々の威力だ。

珠南が威嚇で風を巻き起こすとその反動で黒い衣装を着ている方の覆面が外れた。

するとそこから覗いた顔はこんな戦闘に参加するには程遠い、まだ子供とも言える幼い少女だった。

だがその表情は虚ろで、何も考えていないように見える。

「行け！！」

隠れようとした男が恐怖に怯えながら少女に向かって叫び、それを受けて少女が口をかすかに動かして頷く。

再び風の刃が二人を襲うが、

さらりとかわしなから近づいた珠南が素早く少女を捕らえた。

彼にはその少女を殺す気が無かった。

実は二人は敵地に乗り込んだ時、既にその少女の情報を少し得ていたのだ。

少女はただ単に死なせるにはしのびなかった。

一見命令に違反しているとも思える行為だが、

彼らの行動がどのようなものであれ

結果的に問題さえ無ければ好きにしているのだ。

捕まったと気付いた途端、少女は猛烈に手足をばたつかせ、歯で噛み付こうとした。

珠南は驚きを隠せないでいた。

死に物狂いで抵抗する少女から聞こえるのは荒い息遣いだけで、一切声を立てないのだ。

珠南は鋭い歯や、肘や足の攻撃をかわしつつ少女を捕らえたまま男に向き直った。

「た・・・助けてく・・・!!」

言いかけた男を今度は氷連が造作なく止めをさす。

男が死んだ丁度その時、珠南に捕まりもがいていた少女の動きは鈍くなった。

そしてぐったりとなり、その目は何も無い空間を見つめている。

氷連が近寄ってみても何の反応も示さない。

少女を改めて見て二人はしばらく呆然とした。

「これがあの精霊族・・・?」

その血を飲めば飲むほど宿す力を手に入れる事が出来ると言われている、

多種多様な種族の暮らしている魔界でもかなりの価値を持つ希少種族。

二人が話に聞いていた精霊とは何百年、あるいは何千年もかけて火なら火の、

水なら水の気が集まり具現化し実体を得た存在で

(実体と言っても特にヒト型とは決まっておらず多種多様であるが、

ヒト型をとる場合は類稀なる美貌を持つ瘦身優美な種族という事だった。

瞳の中には龍を思わせるような白い紋様があるらしい。

女の形態をとった者の歌声は特に美しく、聞くものを惹きつけて止まないと言うが、

目の前の少女は歌うことなど到底出来ない状態だった。

二人に少女の事を聞かせた妖怪は、成体になるまで飼っているのだと言った。

閉じ込めて、死なない程度に利用して。逃げる気にならないよう心を奪って。

成体になるまで待っていたのは成体になってからのほうが、当然飲める血の量が増えるからである。

何の気を媒体として実体化したかにより髪や瞳の色

（動物の形態をとったなら体毛の色等）が決定されるのだが、その少女は風を表す特徴的なエメラルド色の髪と、

ぼんやりと開いた瞳をよくよく見ると確かに龍を思わせる白い文様の入った、

髪と同色の翡翠のような瞳を持っていた。

だが二人の前にいる少女はひどく傷つき、汚れていると同時に弱りきっており、

顔を引きつらせていた。

それは黒い服の下に着ているぼろぼろの服よりもっと弱々しく見えた。

「捕らえたはいいがどうするんだ？お前もそいつの血を・・・？」

氷連が何かを考え込んでいる珠南に向かって聞く。

「いや、俺が里に連れて帰る。」

「意外な事を・・・気は確かか？」

「ああ。」

珠南は笑んだ。

「これは、もう既に風を使える。・・・弟子としても申し分ない。」

里に少女を連れ帰ってから、

珠南は氷連と共に自分の住処で少女の傷や汚れを落とす事に専念した。

幼い体につけられた傷の多さに珠南は少しばかり同情した。

遊びでつけられたか、拷問か、あるいは修行の時の傷か。

彼女も妖怪の端くれ、多少の傷ならすぐ治るはず。

それでも消えていない傷がこんなに多いと言う事は、

元は一体どれほど深い傷だったのか。

傷に対しては珠南が妖気を送ってやれば問題はないのだが、汚れはそうはいかない。

珠南は少女のそばに腰を下ろす。

乱れている髪を撫でてやった。

まるで人形の髪を梳いているような感じである。

珠南はそつと湯の入った椀を差し出す。

「飲むがいい、喉が渴いているに違いない。」

お前がいた場所は寒かったが、暖まる事すらさせてもらえなかっただろう？」

術により、命令されなければ置物のように静止しているだけ。

それがたとえ火の中であつても。

どんなに痛くても、辛くても感情を表に出す事が出来なかったのだから。

だが、たとえ感情が出せたとしてそれでどうなるとも思えない・・・その事に気付いて珠南は心の中で自嘲し、

湯気が少女の鼻先に届くようそつと椀を動かした。

「毒じゃない、ただの湯だ。」

少女が何の反応も示さないので、

小さい両手をそろえて開かせた手のひらの上に椀を乗せ、ちゃんと

握らせてやった。

すると少女がゆっくりと口に持っていく。

少女は機械的に飲み始めた。

何をやっているのか本人は分かっている様子だが、

大部分は少女の小さい喉を流れていく。

だが、まだ半分も残っているのに少女は腕から口を離す。

「胃が小さくなってるな、食い物もろくに貰えなかったのか。」

氷連が呆れたように言って少女の手から腕を取り上げて脇に置く。

代わりに、珠南に向かって湯で濡らして温かさの残っている布を放った。

「いや、本来こいつらは食物を必要としないはずだ。」

そう言って珠南が首を振る。

呼吸すると同時に空気と熱で身体を保っており食べ物が必要としないと聞いた。

受け付けなくはないのだが、それでも特に求めたりはしないらしい。

「そうだったな。だが、それにしちゃつれすぎだ。」

「どっちみち殺すんだ、死ななきゃそれでよかったんだろう。」

連中に用があるのはこいつの血と・・・血を抜いた後の身体だけだ。

「

元々その容姿の美しさ故生きた宝石とまで言われるほど美しい種族だ。

剥製にして好き者に売れば闇でかなりの高額で取引される。

珠南はその布を使い、まずは少女の顔を拭いてやる。

指先にすぐ硬い骨を感じた。

少女はその間ずっと大人しくしていた。

だが、その翡翠のようなエメラルド色の瞳が初めて動き、

氷連と珠南に焦点を合わせたように感じられる。

「へえ、まだガキなのに中々綺麗な顔をしているじゃないか。」

傍らで見えていた氷連が声をもらす。

「しかし・・・この布を見る。」

珠南が少女の顔の汚れをふき取った布を見ながら言った。
その布は薄黒くなっている。

汚れた布をまた洗って使うより、新しいものを持つてくるほうが早かった。

べつたりこびりついていた泥や垢の下から、徐々に透ける様な白い肌が見えてきた。

「風を刃にするのは難しいと言うのに・・・
それを連中が教える事が出来たとは思えん。
我流か？お前は幼いのに大した奴だ。」

拭きながら話しかけてみた。

「な・・・ぎ・・・」

「ん？何だ？」

「私のな、名前・・・風・・・」

珠南は丁度少女を拭き終わった所だった。

「そうか。俺は珠南だ、こっちは氷連。」

少女が返事をしないので、珠南もそれ以上は追及しない。

珠南は新しく用意した寝床へそつと少女を下ろし、

仰向けになった彼女に向かって言う。

「これからここで休むんだ。お前は休んだ方がいい、疲れ切っているんだからな。」

風が自分を見上げた。

「眠りたくない。」

「駄目だ、少しでも寝れば気分が変わる。」

「眠ったら、またあの闇に連れて行かれる。」

「？どう言う事だ？」

「操られていた時、おそらくそいつの意識は闇の中だったんだろうよ。」

珠南が声のした方に振り返ると氷連が自分の隣に立っていた。

「ここにいる俺達が闇そのものだ。だから、連れて行かれる事はない。」

氷連が少女に向かって言う。彼なりの気遣いに珠南は内心驚いていた。

同情したのだろうか？

「ああ、そうだな。・・何も考えなくていい。」

凧は二人の言葉をどう受け取ったのか知らないが一つ頷く。

「考えない。」

凧は、二人が自分に何の敵意も無いことが分かって安心したらしく少しずつ喋り始めていた。

珠南は凧の乱れている髪を撫でてやる。

何故かは知らないがそうしてみたくなったのだ。

すると凧はちよつと目をぱちつかせながら珠南と氷連を見つめた。

「子供・・・いたの？」

氷連、珠南は問いかけるような少女の視線を受け、黙って首を横に振る。

「いや、ない。何故だ？」

珠南は言つて、心の中で首を傾げた。

魔忍には親も子も無い。魔忍が一番初めに捨てるもの・・・

正確に言つと無いものが血による絆だった。

魔忍は受け継がれてきた技を弟子に託すと言つ形で保つ。

その弟子と言つものも、

自分がこれと見込んだものを幼いうちに拾ってくるか、さらつて来るかして育てるのだ。

そんな自分達に子供などいるわけがない。

「そんな気がした。だってすごく優しいんだもの。」

珠南と氷連は少女の言葉を聞いて顔を見合わせた。

自分たちが闇の世界ですら恐れられていると知ったら目の前の少女はどう思うだろうか。

その間少女は二人の視線に気付かないのか首を傾げ、一生懸命何かを考えている。

「あの、私考えたの。」

助けてくれたあなたたちに何かしてあげられることがあるんじゃないかって・・・」

二人は不思議な気持ちで目の前の少女を見つめた。

「・・・そうか、悪くない考えだな。」

珠南が重い口を開く。この少女が何と言おうと、

この里に來た以上どこにも行かせる事は出来ないのだ。

「えっと、私が言ってるのはそんな長い間のことじゃないの。

嫌ならいいの、だから・・・」

凧は必死だった。

彼らが自分に危害を加える事はないのだと、

今自分が頼るべきなのは誰なのか子供らしい本能で既に理解していた。

「分かった。お前が眠った後・・・目が覚めたら相談しよう。」

少女は明らかに怯えていた。

それはまたどこかにやられるのではないかと言う不安から来るものと珠南はすぐに察した。

「うん。」

珠南の言葉を聞いて、凧が初めて案吐したような表情を浮かべる。とりあえず、自分が次に目覚めるまではここにいられるのだ・・・。

珠南が室内灯を消して立ち上がりかけた。

その途端小さな手が必死の力で彼を引き止める。

「行かないで！」

氣が進まない思いを抑えて珠南は凧の手を外す。

「どこにも行きはしない。少し時間はかかるが戻ってくる。」

これから長の所に報告に行かなければならないのだ。

もちろんこの少女の事は伏せてだが。

凧はまだ不安そうだったが、大人しく布団にもぐりこんだ。

二人は凧が自分たちの方へつぶりかけた目を向け、そして閉じるまで見守っていた。

廃墟の中の小さな救い（凧&陣）（前書き）

修羅となった凧が、陣と運命の出会いを果たします。

廃墟の中の小さな救い（風＆陣）

女は森に覆われた小道を、よろよろとよろめきながら歩いていた。どうしてこんな事になったのかと心の中でぼやきながら。

赤い髪、青い瞳。そして頭に生えた一本の角。

女は鬼神と呼ばれる種族だった。

純粹な闘神ではないがそれに近い位置に分類されており、戦闘にはかなり長けている。

従って女であろうともそれなりの力は備えていた。

彼女の種族には普段から敵対していた種族がいた。

その日も前々から睨み合いが続いていた部族が襲って来たのだ。

いつもならば力は互角、決着がつかずじまいなのだが今回は違った。自分達はあつと言う間に不利になり追い詰められていた。

その女には子供がいた。

まだ戦うには程遠い……

ようやく立つ事が出来るようになったかならないかぐらいの幼い子鬼。

戦闘には参加せず

その子連れて安全な場所に逃げている最中に相手部族の残党に襲われ、

子供をかばいつつ何とか倒したものの深手を負った。

女の身体には無残な傷がつき、血が流れ、

もはや命の灯は尽きようとしている事は明確だった。

女が感じているのは傷の痛みと、自分の腕の中にいるかわいい我が子の重さのみ。

だが、とうとう焼け付かれるような痛みが薄れ眠気がさしてきた。

子供を抱きしめる腕がだるく、力が抜けていくのを感じた。

そして眠りたいという思ひしかなくなってしまった。

茂みがあった。そこに女は崩れるように倒れると茂みに顔を埋めた。

土の冷たさも感じなかったし、むしろ温かいとさえ感じた。けれど腕だけは、本能的に抱きしめているものを離さなかった。子供はその腕の中で気持ちよさそうに眠り続けていた。

どれほど時間が経っただろう。ふいに。

何者かが近付いてくるのを感じた。

目を開けると側に黒装束を纏った者が一人、こちらを見下ろすようにして立っていた。

男か、女かも分からない。

だがその瞬間、女は自分たちが何故ここまで追い詰められたかを悟った。

噂に聞いたことがある・・・暗躍する戦闘集団、修羅の怪の者達。彼らがこの戦いに加わっていたからか・・・

女の意識が少しだけはずきりし、自分はやはり死ぬのだと実感した。何故か笑いたくなくなったが堪えた。女が最後に言う言葉は既に決まっていたから。

とうとう完全な昏睡状態が近付いてくる事に女は気付いていた。

笑うことで余計な体力と時間を使うのは得策ではない。

「お、願ひ・・・」

声を出すのにこんなに体力が要るのだろうかと少し驚いた。

だが、相手は微動だにしない。

目は心の窓・・・と言う言葉を思い出した。

目を持たない修羅は、おそらく心を持たないのだろう。

「この子、殺さないで。」

我ながら空しい望みだと思いつつ、何も分からなくなった。

女を見下ろしていた者・・・。

彼女の考え通りその者は魔界忍者、修羅の怪の者だった。

その修羅は女、名は風。風を操る風使いである。

自分や仲間や、自分達を雇った連中が相手方の部族を殺し尽くし、もう相手はいないか、

と思った時に微弱な妖気を感じたので彼女はその方向へ向かった。そして女と子鬼に遭遇したのだが。凧は目の前の出来事にひどく動揺していた。

自分の身を省みず我が子を心配する女が、

何故か今はいない自分の師とかぶったからだ。

今までに任務を幾つもこなしたが、

今この場で遭遇しているような場面は初めてだった。

女の方は元々深手を負っていた。

ほっておいてもどうせ死ぬ。

だから手を下さなかっただけだ。

息が絶えた時は殺す手間がはぶけた・・・と思った。

腕の中で眠っている子鬼と違って、癖の無い真っ直ぐな長い赤い髪をしている。

鬼神の種族である証拠に頭に一本の角を持っていて、

泥や血で汚れてはいるものの整った顔と・・・

今は閉じられているが澄んだ青い瞳だった。

・・・美しい鬼だ。

そしてもう一匹・・・

寝ている子鬼をその女から引き離し、片手で首の後ろをつかんでつまみ上げる。

まだ、本当に小さい。

彼女自身は赤子を殺した事はまだ無かったし、

先程の女の言葉がかすかに頭に残っていたのだが、

そんな事で心を動かされたりはしない。

それに、と子鬼に自分を倒す力など到底無いことが分かっているのだ、

つい余計な方向へ思考が向かう。

親のいない子供の辿る道はどうせ知れている。

ましてこの子鬼は一族まで滅ぼされたのだ、ついでに殺してしまおう。

「かあちゃん・・・？」

ふいに子鬼が目を開け、つぶやいた。

・・・殺されると気付いたのだろうか。

あまりに無邪気に笑うので、何とも言えない妙な気分が湧き上がってきた。

経験上殺されると分かったらその表情は恐怖に怯えるはずなのに。

・・・あるいは憎しみに歪むか。

笑うと言う事は、もはや正気では無い事を示しているのだが。

考えた結果、子鬼は自分が殺されるかもしれないと言う事、

そして母の死が分らないほど幼いのだと結論が出た。

突き殺そうと子鬼の胸の前に構えられていた手がゆっくりと下におりる。

子鬼が甘えるように手を伸ばすので放っておけない気がして、つまんだままゆっくり自分の方へ引き寄せるとすがりついてきた。

知らず知らずのうちに子鬼を両腕で抱きしめる。

こんなに小さいものが意思を持って動いている。

自分にもこんな時期があったのかと思うとひどく不思議な感じがした。

子鬼は自分に抱かれていることを何とも思っていないらしくまた腕の中で眠り始めた。

・・・殺す気が起きない。

どうしたらいいか分からずぼんやりしていると後ろから声がした。

「風？どうした、もうここに用は無い。・・・引き上げるぞ。」

見ると仲間が一人、こちらを見下ろして立っていた。

身体の周りを覆う妖気でそいつが誰だかすぐ分かる。

と、彼が顔に付けている覆面を取った。

冴え冴えとした青い鬘のような髪と冷たい・・・同色の瞳と端正な顔が出てくる。

彼の名は呪氷使いの氷連^{ヒレン}。

私がここに入る遙か以前から修羅にいた忍で恐ろしく強い。

今は亡き先代の風使いの相棒で、自分も幼い頃から知っていた。

「その子鬼は？」

彼が目落とし、子鬼に目を向ける。

「氷連、私、この子が欲しい。」

形にならなかった思いが唐突に言葉となって出たので自分でも驚いた。

その言葉を聞いて、普段はあまり変化しない氷連の妖気が珍しく変わった。

変わったと同時にため息をつく。

その時私はまだ覆面をしていた、氷連から私の表情が見えなくて良かったと思う。

「何を言っているのか、分かっているのか？」

「分かってます。・・・でも私が拾った、だから私が育てる。」

「早すぎる。お前自身がまだ子供だ、後悔するぞ。」

一体何を後悔すると言っのか。

頑として言い張る自分を見つめる彼の顔に、一瞬苦いものが走った気がした。

「あれに戦い方を教えたのは俺だが、あれはもともと風の気が実体となったもの。」

風は嵐となり、殺すこともあるが普段は穏やかに流れるものだ。

故に本来は戦いを嫌う・・・任務に向かわせるのも不憫だな。」

氷連の頭の中に、今は亡き先代の風使いとの会話が甦る。

あれは、風が風使いになる少し前。声を落として言うのは先代の風使い珠南。

闇そのもののような黒髪、黒曜石のような瞳。そして牡牛のような角を持っている。

既にこの土地特有の発症しており、まだ身体は一通り動くものの、死ぬのは時間の問題だった。

「風を拾った事を、後悔している様だな。」

「・・・分らない・・・。」

「哀れむな、あいつを拾った時から分かっていたはずだ。」

「・・・まあ、貴様が心配するのも分かる。」

あれの実力は俺も認めるが優しすぎるからな。

だが、あれはもう修羅を理解している・・・そのうち慣れるだろう。

「

それを聞いて、珠南が苦笑した。

「確かに。・・・それはお前の言う通りだ。」

珠南はそう言った後目を閉じ、氷連も押し黙る。

二人の間に沈黙が続く。・・・と、珠南は氷連を憂いを含んだ目で見た。

「お前、修羅のあり方に疑問を持った事は？」

「・・・別に。」

「そうか・・・。」

奴は俺から視線を反らし言う。

「俺は、疲れたんだ。」

「何？」

「掟に縛られる事に。」

一瞬、氷連は誰もいないはずなのに辺りを見回した。

「安心しろ、誰もいない。」

「・・・それで？」

「あれを育てているうちに夢を見た、

自由に外の世界で生きる事が出来るようになる。と言う夢だ。」

「相変わらず甘い事を・・・無理だ、俺たちは戦いの道具。それは変わらない。」

「・・・そうやって教えられただろうが。」

「どうしてもか？」

「ああ。」

「それを変えようとすることは、愚かだと思っか？」

「・・・逃げられんのだ。お前も、俺も。」

「つため息をついて氷連は続けた。」

「風を得て、お前は変わった。」

「そうかもしれん・・・。」

言って、珠南が苦笑する。

「あれを見ていると・・・何か温かいものが湧いてくる。」

不思議だ、こんな感情がまだ残っていたのかと思った。・・・だが、それが心地いい。」

「・・・。」

「あれをお前に頼みたい。」

こんな事を言えるのはお前しかないのだ、お前にも懐いているかな。

「・・・一人前になってもよからぬ事を考える奴が必ずいる。」

誰かの弟子レベルなら到底心配ないが、

他の正式な修羅の連中があれを狙えばまだ荷が重い。」

「まあな。」

その容姿の美しさ故、幼い頃から襲われそうになった事など数え切れないほどある。

元々風の種族はその容姿の美しさ故く生きた宝石とまで言われており、

彼女もその例に漏れていない。

彼女を見慣れているはずの珠南や氷連でさえ時々驚くのだ。

・・・まだ完全な成体とは言えないが、成体になれば更に美しくなる片鱗を見せていた。

「それにお前が、俺が変わってよかったと思うのならお前も変われ。」

「・・・そう言った覚えは無いが。」

少々脱力して言うと、珠南が笑う。

「俺がどうやって変わると言うんだ？お前だって知ってるはずだ、俺の視線の先で一体どれほどの連中が息絶えたか。」

「だが俺はあれに救われた。氷連、お前にもだ。」

珠南は、氷連の言った事にかまわず続けた。

「まったく・・まともだと弟子なんかとるもんじゃないって思っちゃう。」

「お前がまともなのか・・。」

心の中で、それは貴様が甘いせいだと呟く。

珠南はこの集団の中でも一味違っている。

・・・自分は時々振り回され迷惑をこうむるが普段彼といえることが不快な訳ではない。

「そつだ、もう一つ。」

突然、思いついたように珠南が言う。

「俺がいなくなつた後のお前にとつて、

あれの面倒をみるのはいい気分転換になるだろうよ。」

と余計でおせっかいな一言を付け加えた。

そしてそれから数日後に奴は死んだ。

・・・正確には、長に呼び出された時に自分が育てていた愛弟子・・
・ 風に殺されたのだ。

私が拾った、私が育てる・・・の言葉通り、風は拾った子鬼を大切に育て、

「陣」と言う名を与えた。

数年経ち、ようやく自由に歩き始め喋れるようになった彼に向かい、自分が本当の親では無いことも告げたのだが、

それを理解しているのかいないのか陣は大変私に懐き、

私がいる時は側を片時も離れようとしなかった。

だが、いつからか陣を見ているのが心苦しくなっている事に気付く。
そんな時は、必ず今は亡き先代の風使い珠南と、
シュナ

陣を拾った時氷連に言われた言葉を思い出していた。

凧は幼い頃、先代と氷連に拾われた。

二人はお互いに良き相棒だったようで、よく行動を共にしていた。幼い自分はそんな二人を見ていて、

二人が並んでいるとても素敵だなと思っていた。

彼らの強さ、美しさや器の大きさに憧れた。

先代の風使いは男。闇そのもののような、

かすかに風になびく程度の黒い艶やかな髪。

同色の黒曜石のような瞳。整った顔をしていて、

頭には牡牛のような角が生えていた。

背は氷連と同じぐらいで高く、氷連ほどではないけれどがっしりした体格だった。

自分の前にいた先代は、強くて大きくて穏やかで・・・優しくかったと言う記憶しかない。

修羅とはどのような集団が教えられる前に気付いていたし、身を持って実感している今でさえ、

彼が冷酷非情と言われるうちの一人だ、

と言う事実結びつけることは到底出来なかった。

父のように思い、慕っていた我が師。そして氷連に対しては・・・

「なぐぎ？また悲しいだか？」

自分が考え事をしていると、

陣はよちよちとおぼつかない足取りで歩いてきて私の膝の上にちょこんと座り、

心配そうな色を瞳いっぱい浮かべて見上げてくる。

そんな陣の頭を優しく撫でてやりながら私は微笑む。

「少しね・・・昔を思い出していた。」

私がお前ぐらいの時の事と・・・今でも敬愛している方の事。」

普段は何でもないんだと言うのだけれど、

どうせ覚えてはいないだろうと思い直した。

「ケーアイ？」

「ふふつ要するに大事に思ってるって事さ。」

「どこにいるだ？」

「一人は死んだよ。・・死なせたの。ずっと昔にね。」

ドス！！

陣にそこまで言った時、あたりに異様な音が響いたのでその瞬間目を見開く。

「！！！」

気付けば自分の顔に水滴のようなものがかかり、右腕に生暖かいものが伝わっていくのを感じた。

その時、凧の右腕は珠南の腹部を完全に貫いて二の腕まで血で染まっ
っており、

彼の血は止まる事を知らず凧の腕を伝い滴り落ちていた。

「うつ・・・」

一瞬、師が呻く声が頭の上で聞こえたが、凧の目は自分の右腕に釘
付けだった。

何故、自分の腕は彼の体を貫いている？

腕を伝うこの温かいものはなに？

「どうして・・・？」

無意識に呟いて、それを考えようとして・・・頭が真っ白になって
行く。

「ま、た・・・強くなつたな・・・嬉しいぞ・・・」

全く動じた様子のない声が聞こえた。

師のその声で、凧は現実に戻された。

・・・狂う機会を逃した、と、どこかで声がした。

そのすぐ後彼が倒れ掛かってきたので膝をつく。

鍛えられた自分に、彼の身体を支える事が出来ない筈はない。

だが、その時の自分にとって彼の身体は重かった。

肩と左手で師の体を膝で支え、恐る恐る右腕を抜こうとした。

「これ、も・・・掟のうち・・・」

今度は、自分の耳のすぐ側で彼の声がする。

・・・顔は見えない。

自分が彼の体から腕を引き抜いている間、ズルズルと嫌な感触がした。

腕を抜ききった後震えながら腕を見ると真っ赤に染まっており、濃厚な匂いがしてきた。

「・・・何・・・？」

「弟子を、育て終えたら師は死ぬもの。・・・お前は強い。」

自分を責めている口調では無かったがひどく苦しうだと感じた次の瞬間、

彼が死に向かっているのを、そしてこれが現実なのだと改めて悟った。

だが、認められない。

自分のせいで彼が死ぬ・・・そんな事は許さない。

彼の身体を仰向けに横たえようと、

彼の腰にいつも差してあった短剣をすばやく抜き取り、

迷う事無く自分の胸に突き刺していた。

「っ・・・私の血を、血を飲んでくださいっ」

目を閉じて更に刃を動かし、傷口を広げる。

まだ彼に片手で抱き上げられるぐらい小さかった頃、

よくこれで木の枝を切って簡単な笛を作ってくれたり、

川のほとりでは水車を作ってくれた。

・・・どうしてそんな事が今浮かぶのか。

そんな事を思い出している場合じゃないのに・・・

（お前は特殊な一族の生き残りだ。お前の血を飲めば、お前が有する力を自分のものに出来る。

・・・お前を捕らえていた連中はそれが目的だった。）

珠南の言葉が甦る。

彼の言葉で自分が何故あんな場所にいたのか。

その理由が、ようやく分かった気がした。

「あ、あなたが教えてくれた・・・どうか・・・」

（なら私、珠南さまと・・・氷連さまになら血をあげてもいいですよ。）

彼が説明してくれた言葉に対して深く考えて言った言葉ではなかった。

幼い台詞だった・・・と今でも思う。

（・・・それは、どうだろうな。）

自分の言葉を聞いて頭を撫でてきた彼が、苦笑していたように見えた。

目を開けて風が体から刃を少し出すとその刀身は真っ赤に染まっており、

そこからも時折血が滴っている。

だが、やっと思える事が出来た彼の顔は、ひどく険しいものだった。

「バカな・・・止める・・・。」

手を伸ばそうとしたようだったが、すぐに地に落ちる。

・・・病のせいで身体が自由が利かない証拠だ。

自分が殺さなくても彼は近いうちに死ぬ。

それでも、少しでも長く生きて欲しかった。

「お願いです・・・」

傷口から溢れ出る血を無理やり珠南の口に垂らそうとするが、焦りと痛みのせいで力が抜け、うまく口に入れる事が出来ない。

まだ傷口が浅いのか。

もつと傷口を広げなければ・・・

刃を更に動かそうとした瞬間、彼から引き離された。

「風よ、そやつは生き残る事を望んではないい。

・・・死なせるのがよからう。お前の罪は消えた、風使いはお前だな。」

里長の声だった。

・・・何故、ここに長がいる？

「一人・・・？他にも誰かいるのか？なぐぎ？」

陣の声が聞こえた。

「なあ、オラは・・・？」

「え？」

はつとして陣を支えている右手に目を向ける。

血などついていないし長もない、我が師の姿もない。

心の中で苦笑する。どうやら現実に戻ってきたようだ。

「オラは、そいつより大切じゃない・・・？」

陣が大きい瞳を潤ませる。

「ふふっバカを言うな、大切に決まってるだろう？お前は何にも代えられん」

「な、なぐぎ苦しいだ・・・。」

凧は陣を抱く腕の力を緩めた。

「・・・私はお前に救われた。」

きょんとした陣を見て笑いかける。

「お前というの楽しいし、お前といられるのが嬉しい。」

日に日にこの子鬼の存在が大きくなっていくのが手に取るように分かる。

小さい頃からずっと、これと同じような感情を向ける相手が二人いた。

だが、片方を失う代わりに任務と言うものを得て荒んでいった。

ただ、自分が荒む原因だった任務で、

また新たなものを得られたと目の前の子鬼を見て思う。

「だが、修羅ではそう言う感情が必要ないとされていて、必要としないよう育てられる。

私の場合は・・・少し違ったのだけれど・・・」

先代と氷連・・・特に先代からは、多くの慈しみを与えられていたように思う。

「修羅になつてからはそんな感情に何の意味もないと気付いて忘れ始めていた。」

かろつじて一線を越えないよう堪えられたのはもう片方がいたからに他ならない。

けれど、もう自分は修羅だ。いつまでも甘い事を言う訳にいかない。「でも、お前という素直にそう感じる事が出来る。」

陣の目に映っている自分は微笑を浮かべていた。

仲間が見たら何と思うだろう。

・・・私はどうやら、出来損ないの修羅らしい。

陣は何やら困惑したように自分を見上げていたがおとなしく聞いていた。

多分、この子なりに理解しようと必死なのだろう。

「本当に、感謝しているよ。」

「むつかしくてよく分かんないだろ。」

「ふふっそのつもりで話した。」

陣の頭を撫でる。

「私などに育てられるより他の・・・」

まともな連中に育てられた方が幸せだっただろうな・・・

例えば、修羅では無い連中に。

・・・本当の両親に。

すると、陣が首をブンブンと横に振ってしがみついてきた。

「オラは尻が大好きだ！オラの事、どこにもやっちゃだぞ、絶対やだ。」

「陣・・・。」

暗い気分で子鬼の頭を撫でてやる。

「・・・どこにもやりはしない・・・やれはしない・・・長話をしなすまなかつた。」

さ、もうお休み。」

「ここにいちやだめか？」

陣は尻の返事を聞こうともせずそのまま目をつぶり眠ろつとする。

「仕方ない……。」

凧は苦笑した。

安らかに眠っている陣を見てみると、どうしようもなく切なくなつて来る。

いずれ……この子は私を憎むだろう。不幸な境遇に陥れた張本人として。

だが、その事に関しては覚悟の上だったから何の感慨も湧かない。だが、これからどれほど多くの残酷な事を経験するのか。

私は、この素直な鬼をただ命令に従うだけの道具にするのか……。そこまで考えて、陣のまだ細い首を片手でつかむ。

「う……？」

眠そうに、だが不思議そうに私を見つめる目。

何をされるのか知らない目。

怯えてもいない……

自分が手の力を少しでも強くすれば、子鬼の首は簡単に折れるだろう。

力を込めようとした時、背後に誰かの気配がした。

「……。」

別段慌てることもない。自分達の住処に来るのは、修羅の中では一人しかいないのだから。

つかんでいた首を離す。

陣はとうに目をつぶっていたが、

死んでいないことは安らかな寝息から見ても明らかである。

「殺したらどうだ、止めはしない。」

やはり氷連の声がしたので、黙って首を横に振った。

自分の前に彼が姿を現し、ため息をつく。氷蓮は私達の様子を時々観察にくる。

彼は陣に姿を見せないようにしているようだったから、現れるのは陣が寝付いた時が多かった。

自分に近寄ってくると皮肉げな笑みを浮かべた。

「珠南の奴は、お前の手を汚させる事を悔やんでいた。」

「え・・・？」

意外な言葉に首を傾げる。

「大切だと思うようになるほど幸せにしてやれないもどかしさに苦しむ。」

珠南がそれだった。どうやらお前もそのようだ。」

「・・・そんなはずは・・・」

先程陣に向かって言った手前、無い、と言い切ることはもはや出来なかった。

魔忍がこんな感情を持つことは不幸だ。

自分達がどんな集団で、どんな事をして来たのか、

そしてこれからもして行くのか思い知らされるからだ。

普段こんな感情とは程遠い自分たちだからこそ、

実感してしまうと後悔と自責の念から来る苦しみは半端なものではない。

「この修羅に拾われた時点で不幸は決定してるようなもんだからな。まあ、飢え死にするのが幸せかと言うとそれも分からねが。」

・・・後悔するぞと言っただろう。」

凧は黙って頷く。

魔忍が弟子をとる時は大抵襲撃先の赤ん坊や捨てられていた子供を拾った時だ。

当然そのままにしていれば飢えて死ぬだけの者達ばかりだ。

つまり赤ん坊や子供にも逃げ道は無いのだが。

「氷連は、何でも分かるんですね。」

「当たり前だ、お前をどれだけ見てきたと思っっている。」

「はい・・・。」

彼には、凧に対して表には出さないものの心配している点があり、それがとうとう現実化してきていると感じた。

凧の種族は本来争いや殺しを嫌う。けれどそれはあくまで種族としての性質で、

生きていく過程で違うことを教え込まれればそれに見習う。

これまでの彼女は自分が戦いに利用される事・・・

その他手を汚す事に対しても何も感じる事はないようだった。
特に先代が死んで以来は。

けれど、陣を拾ってからの凧はまた確実に変わって来ている。

事実、彼女に陣は殺せなくなりつつある。

・・・余計な感情が芽生え始めている証拠だ。

その感情が、任務の妨げになる事はまず間違いないだろう。

「そのちびをよこしな、どうやらお前には悪影響なようだ。」

突然、氷連が片手を差し出して来た。

彼の妖気が変わったので無意識に凧は陣を腕に抱く力を強める。

寝ている陣が苦しいのだろうか、わずかに身じろぎする。

「どう言う意味ですか。」

「俺には、お前がそのちびに対して余計な感情を抱いているような
気がしてならん。」

・・・例えば、母親のようにな。」

「まさか。そんな・・・」

「任務の最中に妙な気は起こさん事だ。」

お前に悪影響が出ていると判断したらおれはそのちびを殺す。」

「・・・。」

凧は黙った。彼の言う事に心当たりが全く無い訳ではない。

「まあ、お前自身がいくら余計な感情に目覚めたとしても、
任務をやり遂げる事が出来なくなる可能性は低いだろうが・・・」

彼女は表の世界に対して少なからず悪意を持っている。

「問題は、そのガキだ。」

「陣が、ですか？」

「何故、そんなに大事に育てる？」

彼女の膝の上で無邪気に眠っている子鬼を見て、呆れたように言う。

「結果として、いつかそのちびに殺されるんだってことは分かっているのか？」

「・・・はい。」

凧が目をゆっくり閉じて開ける。

弟子は師を殺す・・・言い方が違うけれどそれは半分真実。

「この修羅は、今までそうして来たのでしょうか？」

病で身体が自由が利かなくなる前に。

口ではそう言いつつ凧は軽く唇を噛み、目つきだけが鋭くなる。

そんな凧の様子を氷連はただ見つめた。

「そうだ。」

お前が本当にそう思っているかは知らんがな・・・

「前から言おうと思っていたが、我ら忍にある程度以上の感情は必要ない。」

それは分かっているな？

弟子を育てるにしても同じ事・・・お前は、そのちびを必要以上に構いすぎだ。」

「私は、師とあなたが私を育てたのと同じようにしているだけです・

・
あなたと彼が育てた私は、

修羅として仕事は問題なくこなしている、何も不足はあるまい。」

抵抗する姿勢の凧を見て、彼がまたため息をついた。

「・・・お前はな。」

凧は、自分の言葉に対して明らかに動揺しているようだった。

「だが俺には、そのちびがお前と同じようになるとは思えん。」

「私は・・・いえ、何でもありません。」

言いかけた言葉を飲み込んだ。

それは、言っではいけない事だ。

「よく考える。所詮俺たちは戦いの道具だ、それは変わらん。」

「それは・・・はい・・・。」

「愛情を与えられた者は余計な情けをかけ、しいては命令遂行に関わってくる。」

お前も任務がどんなものか十分知っているだろう。それが、いつか

身の破滅を招く。

他の連中がどんな風に弟子を育てているのか知らぬお前ではあるまい。

育てるならお前もそうしろ、それが里の為・・・お前の為だ。」

言った後、彼は自分から目をそらし、睨みつけるように外を見た。

「つまらぬ感情のために、お前まで長に殺されてはかなわんからな。」

「・・・はい・・・。」

凧は俯き、声が沈んだ。

・・・彼の言いたい事がよく分かったから。

「ごめんなさい・・・。」

俯いた凧を、ため息をついて見る。

こいつのこう言う所は、幼い頃から変わらない。

・・・もつとも、自分に対してだけなのだが。

「・・・だが、驚いたぞ。」

凧はまた顔を上げて彼を見る。

「？」

「お前とそのちびが、珠南と昔のお前にかぶった。

・・・お前もかなりの甘えん坊だったが。」

それから凧を見る彼の目が穏やかになった。

「前々から思っていた・・・お前の雰囲気は奴によく似てやがる、

弟子は師に似るのかねえ。」

「私が、あの方と似ているというのは嬉しいです。」

凧はどこか夢を見るような目つきになる。

私の前にいたあの方の風は穏やかで・・・それはそれは温かった・・・。

「この子は、あの鬼神族の子供・・・きっと、彼らのように誇り高く強い・・・。」

美しい鬼になるでしょうね・・・。」

凧は呟くように言って、眠っている陣をなでた。

その様子はさながら母子のようにしか見えない。

「誇り高く美しいねえ、このちびがか？」

呆れたように言う。

「・・・お前がそんな夢見がちな奴だとは思わなかった。」

「私よりあなたは？長が嘆いておられた、

『あんなに凄まじき力を持っているのに伝えようとしないのは困ったものだ。』と。」

「奴が、お前にそんな事を言ったのか。」

「はい。」

「・・・一つ、聞いていいか？」

「？」

氷連は何かを言いかけて躊躇したようだったが結局口にした。

「珠南を恨んでいるか？」

凧はあっさり頷いた。

「・・・はい。」

「何故だ？」

素直に頷いた自分を見て、氷連は多少面食らったようだった。

「あの時、私を殺さなかったから。」

凧の言うあの時とは、彼女が先代を殺した時だ。

殺しに慣れた今でさえその時の事を口に出すのをためらう。

・・・大きな心の傷として残っている証拠だ。

「何だ、てつきり修羅にした事を恨んでいたのかと思ったが。」

「？」

「お前は、昔から殺しや争いを嫌っていたからな。

あいつはそんな道に引きずり込んだ張本人だ。それに、俺も。」

そんなこと、と凧はやっと声を絞り出す。

「あなたと珠南様に拾われなければ、どうせ死んでいました。」

そうやって凧が目を閉じた。

「私にとって、あの方とあなたがいなくなる事以外に怖い事はありません。」

「・・・今でも、その気持ちは変わっていません。」

先代がいないことだけがひたすら悲しかった。

先代を殺した時に狂ってしまえたらどんなに楽だっただろう。

だが、自分の中の理性がそれを許さなかったのだ。

「他の妖怪がどれだけ私の手によって死のうと、何の関心もありません。」

今までにもう数え切れないほどの者を殺した。

けれど、どんなに手が血に濡れても気にもならなかった。

どのみち表の世界でも、

自分たち種族はハンターの影に始終怯えて暮らさなければならない。

・・・闇で生きることには変わりはない。

「・・・それもそうだな。」

彼女の言いたいことが分かっているの、氷連も反論しようとはしない。

凧は特殊な一族の生き残りだ。

その一族の生き血を飲むと、宿す力を自分のものに出来る。

もちろん力を完全に我が物にする為に血を絞り取らなくてはならない。

い為当然死ぬ。

その力を狙われて絶滅寸前にまで追いやられた。

凧は物心がついていないところに囚われ、

術をかけられ玩具奴隷として虐げられていた。

成体になり、飲む血の量が増えるまで。

・・・哀れな娘だ。

「あの冷たくて暗い場所から救って下さった上、私を育てて下さった。」

・・・力も与えてくれた。」

凧が淋しそうに自分を見ってくる。

「あなたがいて、珠南様がいて・・・修羅になる前までは本当に幸せでした。」

いつか返したいと思っていたのに・・・そう言ったのに・・・。」

冷酷な集団の一員とは思えないほどの慈しみを与えてくれた。
なのに、と凧は続ける。

「その恩を返す前に逝ってしまったわね。」

いえ、私が殺したので逝かせたと言った方がいいのでしょけどね。

「……………」

「本当にお恨みます、珠南さま。」

「……………それほど無念か……………」

その言葉を聞いて、凧が怪訝そうな顔を彼に向ける。

何を当たり前な、と言いたげな凧の無言の視線。

その視線を受けて氷連は苦笑した。

「普通は、師が死んでもそこまで執着を持たないものだ。」

ましてあいつは既に発症していた……………」

珠南はこの土地特有の病にかかっていた。

もういくらの余命も無かった。

徐々に筋肉、内臓組織が石のように硬くなり機能しなくなってしまう
う死の病。

長い潜伏期間があるが、

一旦発症してしまうと後はじわじわと弱って死ぬのみだった。

何故か全ての個体に発症する訳ではないが……………多くの魔忍は逃れ
られない。

だから、身体が自由が利かなくなる前に、それもなるべく早く弟子
をとり技を伝える。

うまく、弟子をとらざるを得ない環境を作っているのだと先代は言
った。

最初は、その意味が分からなかったのだが……………。

「お前は何故、あの時長の住処に侵入したんだ？」

珠南が死んだ時、

かけつけた氷連に長は彼女に住処に侵入した罰を与えたと言った。

「罰を受けると知っていただろう……………幸い軽かったが。」

だが、彼女にとってその罰は拷問以上の苦痛だった。
長も、それが狙いだっただろう。

「あの病を治す方法を知りたくて……。」

珠南は病の進行が比較的早かった。

助けたいのに、

目の前で弱って行く様子をただ見ていただけしか出来ない……その悔しさと怒り。

「……あの病にそんなものがあるのか？」

「いいえ……。」

凧が、悲しそうに首を振る。

「ですが氷連は不思議に思いませんか、

長があればこの土地で生きているのに発症しないのを。」

長はこの里が出来てから長い年月脅威的な支配力で自分達を支配していた。

凧も最初は稀に発症しないものもいるから、

長もその類だったのだろうと思っていたのだが。

「最初は肺を病む事から始まって……」

恐らく血液に入り内臓器官を冒しつつ全身に行き渡る……

毒を吸わされた時の症状に似ています。だから調べてみたのです。

そうしたら……」

凧が喉を押さえる。

「原因は森の霧……に含まれる本当にわずかな毒素でした。

私達が長い年月気付かずに吸っていた……」

でも霧だけではありません、この里の空気も……気付いたのは私だけではない。

あなただっけ知っていると師匠は言った……。」

森に発生する霧は特殊だ。

この森では地面から湧くのだがその土自体に毒素が含まれているため、

それを吸い込む自分達に不治の病をもたらす。

すぐ吸ってどうこうなるわけではないし本当に微弱な毒だから気付かない。

けれど長い年月の間に体内に蓄積されれば恐るべき病を発症させる。何より自分たちはその病を発症する以前に死んでいく事の方が多いから、

病の存在自体を知らない者達も多い。

「・・・。」

「この病気は偶然なんかじゃない。余りにも特殊なここの土地が原因です。」

この里を捨てて別の土地に移ればいいのではと、

長の住処に侵入する以前からに何度か進言しに行きました。」

風が軽いため息をつく。

「でも、無駄でした。」

当然だろうな、と氷連は思う。

長は自分達を妖怪だとは思っていない。

あくまで道具としてみているのだ。

「『そんな事はお前の思い過ごしだ、私はこの通り何も無い。』と言われました。」

霧の事を言っても駄目でした。」

悔しそうに唇を噛む。

「長はこの里の中で一番気の遠くなるような時を生きていますから、彼自身が発症しなくても病に気付いていない筈は無い、

自分の身も危険だと思うのが普通ですから対策をたてていないはずも無い。

稀に発症しないものもありますが長が偶然そうだとも思えませんでした。

けれど治療法を知っていたとしてもあの長がすんなり教えてくれるはずも無い。

ただ、もしかしたら資料なりとも残っていないかと思って・・・」

「それで長の住処に・・・。」

「師匠を治したくて．．もちろん見つかって拷問されるのも一応考えていました。」

「一応．．か。」

氷連は苦笑する。

凧の様なタイプに拷問は大して効果を表さない。

苦痛を与えられることを恐怖とは思っていないからだ。

．．．恐らく凧が囚われていた頃の環境に起因しているのだろうが、それが分かっているからこそ長は当時の凧にとって一番苦痛な事．

．
救いたがっていた珠南を消したのだ。

．．．それも、彼女自身の手で。

「住処に侵入した私に長は最初から気付いていました．．．その目的も、理由も。」

手がかりすらなく、脱力した私の前に長がいつの間にかいた。」

「．．．。」

「『生き続けるのは、私だけでいい。』

お前達が余計な事を知る必要はない。』と言って．．．

それから長が手をかざしてきて何もわからなくなって．．．」

凧が俯く。

「気がついた時に師匠は私が．．．今でも、思い出すのは辛いのです。」

「そうか．．．。」

そつと彼女の頭を撫でる。

長の目的は達成された。

救うべき先代がいなくなった事で彼女は病に対して興味を無くしたのだから。

「お前はよくやった。

自分を責める必要はない。．．．たとえば、正当な戦いではなくてもな。」

「．．．はい。」

「珠南はお前が生きること望んだ、だからお前を生かした。それを忘れない事だな。」

お前がここに來たのは偶然だが、今こうして生き残っているのは偶然じゃない。」

凧は大きく息を吸って、吐いた。

病の他には氣に入らなくて弟子を殺す師と、力及ばず任務で死ぬ忍はいくらでもいる。

「分かっています。」

「それが分かっているならいいさ。」

しばらく沈黙が続く。

「お前は、逃げたくならないのか？」

「何からです？」

「・・・ここからだ。」

「私の居場所は師匠とあなたの側にしかない。」

あなたがここにいるなら逃げる氣にもなりません・・・。

あなたも、その氣になっていたらとっくに出て行ってるでしょう？
まず間違いなく長に殺されますが。」

「まあな。なら、もし俺が死んだならお前はどつする。」

凧が、陣を自分のひざの上から寢床に移す。

「弟子を・・・陣を育てるのに専念します・・・ただ・・・少し悲しくなるとは思います。」

「・・・。」

「少し・・・水が飲みくて・・・井戸に行ってきます。氷連、その・・・。」

彼女の言いたがっている事に氣付いた。

「ああ、そいつの事なら心配するな・・・今は、もう何かする氣はない。」

頷いてやると、凧は明らかにほっとしたようで、軽く頭を下げ出て行った。

忍同士でも足の引きずり合いがある。

一番手っ取り早い方法はそいつの弟子を殺す事。

弟子を殺し、

師である自分のライバルが運良く病を発症すれば技は自動的に廃れるからだ。

だから、普通は弟子をとった事も秘密にしておく事が多い。

任務以外では特に付き合いまする事も無いから、

世代が変わっても気づかれない事もあるぐらいである。

だが、凧は先代の風使い珠南がこの里四強の一角だと謳われたこともあって、

任務に行く時はいつも頭を悩ませていた。

自分が留守の時に狙われれば陣などひとたまりも無い。

弟子として連れ帰るには、まだ幼すぎたのだ。

凧は化粧使いにそれとなく様子を見るよう頼む事になっていた。

今の化粧使いは女。名は華棕。

癖のある長い金髪に赤い目をしており性格も実力も男顔負けの女だ。顔もスタイルも悪い方ではない。

ただ、彼女は珠南に惚れていたから、

珠南が凧を大事にするのを見て多少焼きもちをやいていたと思う。

今は凧をとても気に入っているが。

凧はかなり警戒していたものの、最近では段々と頼りにするようになった。

下に弟子が三人いるが、

まだ彼らもそこそ幼いから、

自分が任務で様子を見れない時は弟子達に見させているようだった。

それからしばらくして。

「なぐぎ？」

眠そうに呟いて、目をこしこしとこすりながらむくつと陣が起き上がる。

そして氷連を見て固まってしまった。

「・・・。」

「何だ。」

一応声をかけてみるものの、

目をぱちくりとさせて自分を見つめたまま何も言わない。

だが、そんな陣を見て無理も無い、と思う。

いつもは陣が寝ている時にしか来ないので。

姿を見せるのはこれが初めてだ。

予想外の出来事だったが・・・相手は子供だ、どうせすぐに忘れるだろう。

「お、おっさん誰だ！？ 凧はどこだ！」

「あいつは、少し用があつて出てる。頼まれたから見ていた、何もするつもりは無い。」

「そうだべか・・・。」

凧が無事だと知って安心したらしいのと同時にしゅんとなったのが明らかに分かる。

よほどこの鬼に懷かれているらしい。

「お前は、一人でいられないのか？」

「オラ陣だ！！別に淋しくなんかないやいっ

凧が任務に行つてゐる時だつてちゃんとして待ってるんだからな！」

「そうか、そりゃ悪かった。」

だが彼は、

任務に出ようとするたびに陣に泣きつかれて困惑している彼女を知っている。

陣をつくづくと観察してみる。

くせのついているまだ短い赤い髪と、頭から一本覗いている角、澄んだ青い瞳に尖った耳。

幼いが紛れもなく鬼神族だ。

と、むむっと陣が何やら気難しい表情をして自分を見てきた。

「・・・？」

「おっさんは風が好きなのか？好きなら諦めるべ、風にはオラがいるんだからな。」

突然何を言い出すかと思う。大体風と自分は大人と子供ほどの年齢差があるのだ。

「風は、オラが嫁さんにするだ。」

「ふっ・・・」

子供らしい素直な発想に思わず噴出す。

本当に、あの鬼神族の子供か？そうとは思えんガキだ。

氷連の脳裏にも鬼神である彼らとの戦い・・・

虐殺と言った方が合っているかもしれないが・・・

は記憶に残っていた。

確かに彼らは予想以上に気高く強い種族で驚いた覚えがあった。

だが、目の前の子供からは気高さなど到底うかがえない。

風は、このちびを高く評価しすぎなのでは。

「悪いことは言わん、止めておけ。」

その澄んだ青い目を見つめる。

明らかに不満そうな表情になった。

「何で！」

噛み付くように言う。

「風が好きか？」

「ああ。」

そう言っで大きく頷く様子を見つめた。

「もし、風がいつかいなくなったらどうする？」

「そんな事ないべ！だって風はオラが大切だって・・・

どこにもやるつもりは無いって・・・言ってくれただ。」

「そうか・・・」

今にも泣き出しそうな様子にふうつとため息をつく。

ここで陣を泣かせたら、後で風は何を言われるか分かったものではない。

「お前が、風に一番大事にされている事に変わりは無い。」

変なことを言って悪かったな。」

「やっぱりそうなんだべか？」

先程とはうって変わってとても嬉しそうな表情になる。

本当に、表情がよく変わる奴だ・・・

だが、そこまで考えていや違うと思い直した。

子供とは、本来はそんなものなのだろう。

自分がいつの間にか幼少の頃の凧と陣を比べている事に気付いた。

・・・違いすぎだ。

凧は最初、笑うことを知らない子供だった。

「凧・・・どっか行っちゃうつもりなんだべか？」

突然、陣が不安そうな表情をして自分を見て来る。

「さあな、それは知らん・・・

だが、お前という時のあいつが一番穏やかだ。それで十分なんじゃないか？」

彼女の妖気が近付いてくる気配がした。

「・・・凧は、お前を慈しんでいるようだな。」

呟くように言っただが、それが聞こえたららしい陣がぱつと顔を輝かせた。

「ああ、オラを何にも代えられないって言ってくれるからな。」

「そうか・・・。」

嬉しげに、どこか自慢げに言う様子を静かに見つめる。

と、ギイ・・・と、扉が開いて凧が入って来た。

「氷連、すまな・・・」

「凧！」

陣が寢床から飛び起きて駆け寄ってくるのを見て驚いたが、彼の身長に合わせて床に膝を着き、更に少し腰をかがめる。何故か必死な形相をしていた。

「どうした、起きたのか・・・。」

「凧はオラの事どう思ってるんだ！」

「？」

「オラの事・・・嫌いか？」

「何故だ、私の言った事を忘れたのか？・・・わっ」

その言葉を聞くなり陣が嬉しそうに飛びついてきた。

少し後ろに仰け反ったが、凧は優しく陣の背を撫でる。

「ふふっこんなに大きくなったのに・・・」

「凧はオラがいないと淋しいだろ、だからオラはずっと一緒にいてやるんだからな。」

「はは・・・それは有難い・・・。」

陣の腕に力がこもり、更にしがみついて来る。

「ずっとずっと一緒だべ・・・。」

蚊の鳴くような声で陣がつばやいた。

「陣・・・。」

この子がこんな事を言うなんて、一体どうしたのだろうか。

・・・出来るなら、今の言葉を守りたいと思った。

けれど。

ふいに、陣が自分をつかむ腕の力が緩んだ。

そっと腕に抱きなおすと眠ってしまったている。

今は普段寝ている時間をとくに過ぎているから無理も無いけれど、手だけは服を掴んで離さない。

氷連は一連の光景を黙って見つめていた。

凧と陣を見守るようになってから必ず見れるようになった光景だ。

陣を見つめる凧の表情は、普段からは考えられないほど優しい。

凧に甘えてすがっていた・・・今は眠っている陣に視線を移す。

この里で、いや、どこを探しても。

そうやって簡単に凧に触れられる者は陣以外にいないのだ。

白く、美しい大きな鳥（陣&凧）（前書き）

陣と、陣の師匠である凧との一コマ。ほのぼのメインですが、陣の事で悩む凧など、少しシリアスな部分もあります。

白く、美しい大きな鳥（陣＆凧）

「陣よ、また強くなつたな。」

微笑んで彼に向かって言つた後、

凧は一足先に地上に降り立ち愛弟子のいる上空を見上げた。

「へへっ。」

陣が嬉しそうに笑い、華麗に宙返りをするのを目を細めて見つめる。彼はいつも、実に楽しそうに空を飛ぶ。

丁度、飛ぶことを覚え嬉しくてたまらない若鳥のようだった。

小さかった子鬼は、陽気で素直な性格を持つ若鬼に成長した。

言葉が分かり始める頃から自分達修羅の役割を、

そして自由に動けるようになってからは修行させていた。

・・・これもすべて任務の為なのだといひ含めながら。

だが、陣はそれに構わず自分が強くなる事だけを楽しんでいるように見えた。

「凧〜！！」

彼女の名を呼び陣が近くの地面に降りてくる。

着地の瞬間、辺りの土が舞い上がり砂煙になった。

「相変わらず、着地が派手だな・・・。」

笑つて軽く注意し、側に寄る。

「もうすぐお前も、一人前になる・・・。」

「いちにんまえ〜？」

「ああ、私の代わりに里の外に出るんだ。」

「凧がよく言つてた任務つてやつだか！？どんなんでもやってやるべ〜！」

勢い込んでいる陣を見ると、

あまり自分達の血生臭い仕事を理解していないのだと思う。

そんな陣を不安に思ふ反面、どこかほつとしている自分に気付いていた。

ふいに。

ヒュオーーーーー！

と、すごい風が二人の間を駆け抜けたとたん、陣が抱きついてきた。

「風ー！」

「わっどうした！？」

風は、今では自分より少し背が高くなった陣の腕の中に納まってしまい、

彼の顔を見るにはほんの少し目線を上げなければならなかった。

陣には風が駆け抜けた一瞬、風の姿が歪んで溶けて、

風と共に行ってしまおうように見えたのだ。

「風が・・・どっかに行っちゃうんじゃないかと思っただ。」

しつかり抱きしめているのに不安だった。

「陣・・・」

風はやつと両腕を伸ばして陣の髪をなで始める。

「な、何だべ？」

「ああ・・・何でもないよ、お前がそう言ってくれて嬉しくなった。」

「

風が微笑しながら言う。

「いーや、風は本当に笑ってない！」

「・・・まいったな、私の心が分かるのか？陣は。」

痛いところを突かれた、と心の中で舌打ちする。

「んだ、風で分かるだ・・・」

少々不満そうな陣を風は見つめる。

「風、何か変だぞ？」

「そうだね・・・」

その日の夜。

「な、風？」

「ん？」

「オラが一人前になったら風はどうするだ？」

いつもならばすぐに寝てしまう陣が寢床から半身だけ起こし、椅子に座って魔界の空を見ていた私に珍しく話しかけてきた。

一人前。それはすなわち正式な修羅になる事を意味する。

「そうだな・・・とりあえず、ここにはもう戻って来ない。」

「遠くに行くのか？」

「ああ・・・お前が後を継いでくれるからな。」

「ふん。じゃあ、一人前になったらもう風と一緒にはいれねえのか・・・」

陣が少しだけ耳を垂らして上目遣いに私を見た。

「どうした、急に甘えん坊になったな・・・」

ふと、考えが変わる。

「いや、今に始まった事ではないか。」

「！昔の事を出すのはずるいだぞ！オラはもう子供じゃないやい！陣が頬をふくらませて風を見る。

成長期で背は高くなっても、やはり子供らしさは抜けていない。

「そうかな？私にはまだまだ子供にみえる。」

「む・・・。」

陣がむつつりと押し黙った。

「・・・そう怒るな、悪かった。」

「分かったならいいべ！」

それから彼は、いつになく生真面目な表情で私を見る。

「なあ、絶対遠くに行くって決めてるだか？」

「何故、そんな事を聞く？」

すると陣は照れくさそうに、だが目には真剣な色を湛えて言う。

「オラ、一人前になったら風を嫁さんにするって決めてただ。」

「！ふふつ・・・。」

思いもよらない陣のその言葉に風は笑ってしまった。

「もうそんな事を考えつくような歳になったのか・・・くくつ」

風はこみあげてくる笑いを、手で口を覆い必死で抑えた。

「笑うなや！」

彼は、恥ずかしさと怒りのために真っ赤になっている。

一方陣は、真剣に受け止めてなさそうな風の声を聞いて不満だった。本当はもっと前から考えてたんだ！と言いたかったがそれは内緒だ。そして、眠たくて閉じそうになる目を時々こする。

と、風が少し悲しそうな目で自分を見た気がした。

「・・・お前は、ろくに女を見たこと自体無いからな。」

ため息をつく。

「だから、

ただ単に側にいる女である私に対してそう思っていると信じ込んでいるだけだ。」

「そんなんじゃないべ！」

「ほらね、そうやって勘違いを増長するんじゃない。いいな？」

「そんなんじゃない・・・」

「早く寝ろ、眠いのだろう？」

陣が何かを言いかけたのを制して言う。

彼はその言葉を聞き、何かをいいたそうだったが素直にごろりと横になる。

「風・・・オラの事嫌いになったのか？」

それを聞いて風は立ち上がると、陣の寝床に腰掛け手を差し伸べ、無造作に投げ出された手を握る。

・・・何故か、そうしたくなった。

「お前が眠るまでこうしている・・・言い過ぎたようだ、すまない。」

「ん・・・。」

嫌がるのか、それとも怒るのか、

と思っていれば予想に反して陣は素直に差し出された手を握った。

「なあ、風・・・」

「何だ。」

陣の、自分の手を握る力が強くなった。

「どこにも行っちゃだぞ。」

「・・・。」

うつ伏せになった陣の表情は分からない。

「小さい頃に帰ったみたいだな。」

「うるさいべ。」

クスツと笑い、寝息を立て始めた陣を見つめる。

「お前・・・何か感じてるの？」

凧はもう片方の手で陣の髪をなでてやりながらそつとつぶやいた。
心が暗くなっていく。

私はこの鬼を、手を血で染めさせるのか・・・

ただ従うだけの道具にさせてしまうのか・・・

彼の首に手が伸び、触れるか触れないかぐらいの瀬戸際で止まる。

奇妙な事に、

間違いなく殺そうとしたはずなのに殺意のない事が自分で分かっていた。

自分に殺意があれば、自分で分かる以前に陣が飛び起きる。

陣は本当に強くなった、そしてこれからまだ強くなるだろう。

事実、彼の成長の早さに凧は内心驚いていた。

驚くと同時に誇らしかった。・・・けれど。

陣の首を掴みかけた自分の手を見つめる。

一体どうしたのだろう？ 陣を修羅にしようとしているのはまぎれもなくこの私。

その為に育てているのだ。

今殺せば、教えた事は水の泡だと言うのに。

陣を殺すのは簡単だ。今までそうしかけた事は何回もあるけれど、今回も焦って殺す必要は無いと言う事だろう。

凧は陣を殺そうとする度に毎回同じように思い、殺すのを止める。そう思う事で、彼を殺せない理由から目を逸らしていた。

・・・逸らそうとしていた。

けれど。

どんなに目を逸らしても自分の中に答えがある。

陣に対して、

自分が母親と言うものと同じ感情を抱いているのだ、
と心のどこかが自覚しているのだから。

私は多分・・・いや、きっと陣に修羅になって欲しく・・・
そこで思考は中断させる。

そこから先は考えてはいけない事。

私は戦いの道具修羅。

感情は必要無い。

当たり前のことだ。

修羅として・・・当たり前・・・

胸が痛い。

心映虫（凍矢、凧）（前書き）

凍矢は、凧より不思議な虫の存在を知る。

心映虫（凍矢、凧）

任務を無事遂行できた。

里へ戻り、凍矢は里から少し離れた山肌露な場所に一人で来ると自らの妖力で氷の剣を作り出す。

と、その美しい氷の剣を思いっきり岩肌に突き刺し、横に払った。その衝撃でかなりの範囲がえぐりとられ、ぱらぱらと砂が舞う。つい先ほどの事だ。凍矢は任務を共に遂行した凧の後を追った。

「凧！」

「凍矢？」

彼女の肩から流れる血を見て、

妖気を集めた手で何も言わず彼女の傷に触ろうとする。

彼女は先ほどの任務で敵から攻撃を受けたのだ。

凧は凍矢が何をしたいのかが分かったが、

彼の手をつかむと優しく押し留めた。

「自分で出来る、妖気を無駄遣いするな。」

だが凍矢は制止する彼女の腕を振り切り尚も手を当てようとする。

凧はため息をつくと彼の制止を諦め、黙って傷が癒えるのを待った。

「何故、かばった？」

凧の耳に、ぼつんと呟く声が聞こえた。

自分は彼女より背が低い。

彼女がかばわなければ敵の爪は確実に自分の額を貫いていただろう。

「かばう？」

彼女が怪訝そうな顔をする。

「私はまだ未熟だな。お前に手間をかけさせてすまない。」

凍矢は黙って、傷があつた場所に目をむける。

上手くはぐらかされたと感じた。

凍矢の脳裏に浮かんでくるのは彼女の肩に食い込んだ奴の爪だった。それについた血だった。

あの時、凍矢は初めて彼女が傷つけられるのを見て、流れる血の匂いをかいだ。

あの時反応出来なかった未熟な自分が許せなかった。背後に誰かの気配を感じた。

何も考えずに切りかかろうとして・・・止めた。

凧だった。

「どうした、何を怒っている？」

静かな、美しい声が聞こえる。

「怒ってなどいない。」

そうは言うもののそれは嘘だ、気分がむしゃくしゃしていた。

「そう？浮かない顔をしている。」

「どうしてここに来た。」

「何となくだよ・・・。」

彼女に近付く。ふと、彼女が自分の後ろを見て目を少し見開くのが見えた。

「？」

振り返ると崖の下から蛍のような小さい光が数個、ふわふわと浮かんでいた。

下から上がって来るその数は段々と増えていく。

「もう、そんな時期になったのか・・・。」

呟いて、凧が目を細めた。

「何の事だ？」

ああそうか、と凧が頷く。

「あれを見るのは初めてか？」

凍矢は見たことが無かったので首を縦に振る。

「あの光は心映虫と言ってね、私達の心に反応して・・・幻を見せる。」

「

幻？」

「もし・・・過去に想う奴がいたなら、虫が特に集まっている所へ行け。」

「そんな奴はいない。」

「気が変わる事もある。では行く、邪魔をしたな。」
過去を映し出す虫・・・

心に思い描いた姿と共鳴し、映し出す虫・・・寿命はわずか数時間。自分にとって過去は存在しないも同然だ。修羅になつてからは尚更だった。

凧は誰かいるのだろうか。こっそり彼女の後を追った。

人氣が無い森の中。彼女が無言で見つめる先には男が二人。

片方は自分の師である氷連。もう一人は・・・？

虫に照らされる髪の色は黒。そして牡牛のような角を持っていた。

見た事の無い顔だが彼女の話聞いていたので、

彼こそが彼女の師なのだと理解する。

長い間、凧は無言で彼らを見つめていた。そして彼らも何も言わない。

虫はただ、彼女の思う死人を映し出すだけで、

虫が作る幻影は動く事も話す事も出来ないのだ。

虫が死んでいく。

所々光が落ちていくのが分かる。

彼らの姿もそれと同時に薄れていく。

黒髪の男の方がかすんできて、向こう側が透けて見え始めた。

凧は、少し躊躇った後両腕で抱きしめようとしたが、

彼女の腕の間から光が幾つか上がって・・・消え、彼の姿は消えた。それに習ったのか師匠である氷連の姿も段々と薄くなり始めた。

今度は、凧は彼に向かって倒れこむ。

しかし、もとより虫が作り出した幻影、

彼女を受けとめられるはずは無い。

凍矢の予想通り、凧の身体は氷連の身体を突き抜けてしまい、

彼を抱きしめるはずだった両腕も空しく宙をかいて、

そのまま地面に叩きつけられた。

倒れた彼女の手の間から一つの光がゆっくりと上っていき、やがて

消えた。

凧はそのまま動かない。

ただ、両腕で固く土を握り締めていた。

泣いているのか・・・？

と、師匠が膝をつくと、投げ出され、

土を掴んでいる彼女の手に分の手を重ね、

もう片方の手で一度だけだがそつと優しく彼女の頭を撫でたのだ。

凧矢はそれを見て胸がざわめくを感じた。

何だ、この気持ちは・・・。

すぐに師匠は立ち上がり、彼女から離れた。

既に彼の姿も消えかけていた。

今まで動かなかった凧が素早く立ち上がり、

彼を追うように一歩、また一歩踏み出す。

その先は崖だ！

「凧！！」

「え？」

茂みから飛び出すとすぐさま駆け寄って細い腰に腕を回し、
しっかりと引き止めた。

前に向かおうとした彼女の身体が軽く前のめりになり、すぐ体勢を
立て直した。

「お前・・・何やってる！」

彼女に回した腕に力がこもる。

「凧矢？どうして・・・。」

「落ちる所だっただろう！」

放したら・・・消えてしまいそうで怖い。

「ふふっ・・・」

「何が可笑しい？」

すると自分の手に彼女の手が重ねられる感触がした。

「少し苦しい・・・放してくれないか？」

それを聞き、慌ててぱつと彼女から手を離す。

と、彼女が面白そうな表情を浮かべながら振り返りこちらを向いた。
「その様子だと・・・私が飛べるのを忘れていたらしいな。」

はっとして今更のように思い出す。

確かにそうだ。彼女は風を操り、空を飛べる。

たとえあのまま落ちていたとしてもどうと言う事もないだろう。

「落ちていたとしても、何も心配はないよ。」

「そう、だったな・・・もういい。邪魔をした。」

「ありがとう、お前に心配されるのは嬉しい。」

「・・・。」

「断ち切らなければならないのに・・・どうしてもこの日を待つて
しまう。」

彼らはこの世のものではない。

あれは、私の思いが映し出されたものに過ぎないのだと知ってもな
お。

「そうなのか？」

ただ単に記憶が映し出されただけなのなら、

師匠にあんな動作が出来るだろうか。

どこかでつながっているのではないのか。

無理やり断ち切らなければならないものなのだろうか。

「あれは私が想い描いた姿を映したもの。幻だと言っただろう？」

彼らはいない。私に触れる事も出来ない・・・私も彼らに触れられ
ない。」

けれど、と凍矢は思う。

「・・・師匠が、お前の髪を撫でていた。」

すると風が自分を見つめ微笑み、少しかがんだように見えた・・・
と思った時、抱きしめられていた。

彼女の肩越しに光が舞うのが見える。

「彼らは死んだ。」

耳元で静かな声がする。

「だから、何もしていない・・・。」

風の言葉が聞こえたと同時に、
凍矢からは彼女の肩越しに見えるほんの少し残っていた師匠の幻影
が消えた。

戦乙女の休息（凍矢&凧）（前書き）

凍矢が、凧への気持ちを自覚する一コマ。凧の師匠達の話も出てきます。

戦乙女の休息（凍矢&凧）

そこは魔忍の里の、集落の周りを覆っている深い森。

魔忍の里は深く茂った森と両端を切り立った崖に囲まれている深い谷間にあり、

見つける事自体が非常に困難な辺境の地にあった。

森には方向感覚を冒すと言われる特殊な霧が時折発生し、
気をつけていないとすぐに迷子になってしまう。

ここを住処としている自分たちにとっては慣れたものであるのだが、
よほどの事がない限り森に好き好んで出かけない。

中には変わり者もいるのだが。

それに当てはまる人物の事を考えながら、

しばらく歩くと樹齢何千年を経ているであろう巨大な魔界樹を見つけた。

かなり太い幹をしていて、根でさえ太い丸太を思い起こさせる。

木が立っている場所は里から離れていて、少し小高い丘になっており、

更には切り立った崖のすぐ側にある。

その、丸太のような根に座っている誰かが見える。

側に近寄ってみると彼がよく知っている女だった。

彼女は目を閉じている。

眠っているように見えるが決してそうではないのだと凍矢は了解していた。

女の髪は長くて透けるような、艶やかなエメラルド色をしている。

その髪が風に自由になびいて、エメラルド色の柔らかい波を作っている。

それだけで綺麗な一枚の絵のようだと凍矢は前々から考えていた。

「・・・どうした。」

彼女は座ったまま、自分が来た事に動揺した様子もなく目を開けず

に言う。

彼女は風。

この里でも最強の部類に入る風使い・・・

はっとして、自分は彼女を探していたのだと思出す。

何となく、ここに来ればお前に会える気がしてつい足が向かってしまう・・・とは言えなかったし、

どうして風に会いたくなるのかも分からない。

「ここにいたんだな。」

それを聞いた彼女が目を開けて面白そうに自分を見る。

「お前は、ここに来る度にそれを言う。」

（ここが、里周辺の中で風が一番穏やかで落ち着くんのだ。）

最初に彼女をここで見つけたとき、彼女はそう答えた。

彼女は大抵ここにいて、遠くを見ているか今ののように目を閉じているか・・・

美しい声で小さく歌っているかだった。

そうしている彼女に任務中の冷徹さ、恐ろしさなど微塵も感じられない。

凍矢は黙って彼女の隣に腰を下ろす。

目の前に深い裂け目があるからここに落ちたら助からないだろうと考えながら。

自分が腰を下ろしたと同時に風が自分のほうを向く。

その、翡翠のような瞳に自分が映るのを見て、

凍矢は引き込まれそうになるのを意識的に堪えなくてはならなかった。

そうすると自然に彼女の瞳の中に刻まれている、龍を思わせる白い文様が目に入る。

この模様の入った瞳を持つ種族は特殊な力を持っていた。

自分の生き血を全て飲ませれば、自分の持つ全ての力を飲んだ相手に与える事が出来る。

その為に絶滅寸前にまで追いやられた種族だと聞いていたが、

その風が何故ここに入るに至るのかは分からない。

「いい風が吹いているだろう?」

彼女が自分から視線を外し遠くを見る。

逃げたいのだろうか?

彼女が遠くを見る時に、何かとも考えず漠然とそう思う。

「そうだな。だが・・・」

確かに自分の側を優しく通り過ぎていく風を感じる。

だが、そうでなくても彼女の側にいると絶えず風を感じるのだ。

そしてここまでの会話はいつもの事だった。けれど今日はもう一言付け足してみる。

「お前の側にいると、風が絶えない。」

彼女が視線を自分に戻す。

「不快か?」

「いや。」

「それならいい。」

そう言った後、彼女は目を閉じてしまった。

凍矢はふと、後ろに隠したものを思い出して彼女の前に差し出す。

すると気配を感じたのだろう、

風がサツと目を開けたが目の前に突き出されたものを見て目を大きくした。

「これは?」

凍矢が差し出したのは、器用に枝を組んで作られた片手に収まるぐらいの大きさの水車。

「お前、これが気に入っているんだろう?」

「私に?」

凍矢は黙って頷く。

「お前に贈り物をされる覚えは無いが・・・」

「そんな事は、どうでもいいだろう。」

そう言った自分を彼女は不審そうに見てきたが、素直にその水車を受け取り目を落とす。

彼女の目が、更に優しくなった気がした。

以前、彼女はある村を通った時その村にあった水車をぼんやりと見つめていた。

その時の彼女の目が優しくなったから、凧はあれが気に入っているのだと思った。

そして、あれぐらいなら作れる・・作ったら、笑ってくれるかと思っただが。

「わざわざ作ったのか？」

「そうだ。変か？」

自分なりに良く出来たほうだと思っていたのだが。

「いいや・・嬉しいさ、ありがとう・・。」

彼女の言葉を聞いて、やはり、自分の選択は間違っていないかったのだと思う。

そして、彼女が嬉しいと言ってくれるまで緊張していた自分に気付いた。

「良かった。」

「？」

「お前の、沈んだ顔を見るのは、嫌だ。」

本当のことだったのでそのまま答えた。

「・・・そんな顔をしていたか？」

凧がそう言いながら不思議そうに首を傾げる。

「していなくても、分かる。」

無然として言い張る凍矢を見て凧は心の中で苦笑し、無意識に腹を押さえる。

「そう・・気にしてくれたのか。」

「万が一と言う事もあるからな。」

何が万が一なのか、と凍矢は心の中で自嘲する。

自分でも良く分からなかったが、この頃凧を見ているのが恐ろしかった。

それは彼女が恐ろしいと言う訳ではなく・・・

どこかに行ってしまうのではと言う不安から来る恐怖だった。
例えば、自分の手の届かないどこかに。

その恐怖を何故自分が感じるかも凍矢には良く分からなかったのだが、

随分前から風はよく考え事をしているようだった。

そんな時の風は心なしか沈んだ顔をしているが、何を考えているか自分は知らない。

ただ一つ言える事は、そんな風を見ているのは不愉快だと言う事だった。

心なしか妖気も衰えているように見える。

・・・それでも自分が彼女に敵うとは思わないが。

怪我は無い。

病気とも思えない。

だが。

以前よりもますます痩せてしまった気がする。

技のキレが鈍ってるようにも見えるのは気のせいかな？

「なあ、凍矢。」

風に視線を戻すと、彼女は凍矢が贈った水車にずっと目を落としていた。

「お前が他者に心を開こうとしないのは、そいつを失うのが辛いから？」

「・・・別に。」

何故突然そんなことを聞くのだろうか？俺は、お前に対しては・・・
そこで思考を止める。

いつかは掟の名の下に、自分より先にいなくなるであろう彼女。

おそらくは遠くない将来に。

分かりきっていることだ。

考えて、結論が出て、認めてしまったら自分がどうなるのか嫌な予感がする。

だから、それ以上考えない。

闇に生きる自分たちにとって他者を信用することは危険な事の一つだろうが。

「そう言う事はよく分かんが、割り切った方が楽だとは思う。」
凍矢の回答を聞いて、凧は水車を見つめながらどこか憂いを含んだ目をした。

「・・・そうか、そうだな。」

確かに<修羅>として生きていくならその方がいい。

同じく修羅>の中でさえ騙し合い、戦い合い、時には殺される事もある。だが・・・

「変な事と思うかもしれないが、聞いてくれるか？」

自分を不思議そうに見つめる凍矢を、凧は優しく見つめた。

「？ああ。」

「お前もそのうち気が付く、誰かに心を開くのも、そんなに悪いものじゃないってな。」

「意味が・・・」

分からない、と言いかけた所で凧が口を挟んだ。

「今はまだ、分からなくていいよ。」

「お前にはいるのか？」

「もちろん。」

「・・・そいつは？」

「正確に言つとそいつら、だな。二人とも死んだよ・・・随分前に・・・ね。」

凧の声が低くなる。

「そうか・・・」

しばらく沈黙が続く。と、凧が立ち上がった。

「せっかくの機会だ、この水車を回してみたい。いいか？」

「あ、ああ構わない。」

見かけは上手く出来たが、実際試した事は無い。

予想外の展開になったなと思いつつ歩き始めた彼女の後ろをついていくと、

自分達が普段飲料水に使う井戸に沸く地下水脈の源、里から多少離れたところにある川についた。

凧が立ち止まった所で凍矢は不思議なものを見た。

川の水に浸かっているか浸かっていないかぐらいのほとりに3つの小さい・・

自分が作ったものと同じような本当に小さい水車が回っていたから。ただ、順調に回っているものが二つと、壊れたものが一つ。

「こっちは、私がずっと小さい時に先代が作ってくれたもの。」

コトンコトンとかすかな音を響かせて滑らかに回っている水車を指差して言う。

だがそんな昔に作られた、たかが木を組み合わせで作られた水車が保つだろうか。

「時々、ここに来て作り直してるから。・・だから、もうほとんど私が作ったようなものだ。」

凧が苦笑した。

「そっちの水車も、同じ時にお前の師が作ったもの。」

見ると、凧の師が作ったらしい水車の近くに、

多少水をかく動きは遅いがこちらにもかわいらしい水車がある。

あの師匠が・・想像すると何だか変な気分だ。

「残りの一つは・・」

壊れた水車を指差す。

「その時に私が二人の真似をして作ろうとして失敗したもの。」

・・直す気になれなくてそのままだ。」

凧が、凍矢の作った水車を他の水車と同じように少し流れのある所に浸すと、

見事に涼しい音をたてて回り始めた。

それを見て凍矢はほっと胸を撫で下ろす。

「凍矢、ありがとう。」

凧が自分に微笑みかける。

「嬉しかった。」

「・・・礼ならさつき聞いた。」

何故か顔が熱くなるので、彼女から視線を逸らす。

「懐かしい・・・。その二つの水車は、私を喜ばせようと先代と氷連が作ってくれたもの・・・」

見ると、風の顔には切なそうな表情が浮かんでいた。

「喜ばすため・・・？」

凍矢も他の連中がどんな風に弟子を育てているか知っている。

喜ばすと言言葉は無関係だった。それでも自分は、師に虐げられた覚えはないが。

「ああ・・・私の師は、少し変わった方だった。」

先代の風使いは男。名は珠南。私を拾い、育てた風使い。父のように思い、慕っていた我が師。

闇そのもののような黒い髪。氷連ほど長くなく、かすかに風になびく程度の長さだった。

それに黒曜石のような黒い瞳に整った顔、牡牛のような角を持っていた。

背は氷連と同じぐらいで・・・とても穏やかな方だった。

自分の前にいた先代は、強くて大きくて穏やかで・・・優しくかったと言う記憶しかない。

修羅とはどのような集団か教えられる前に気付いていたし、身を持つて実感している今でさえ、

彼が冷酷非情と言われるうちの一人だと言う事実結びつけることは到底出来なかった。

父のように思い、慕っていた我が師。そして氷連に対しては・・・。

氷連、冴え冴えとした青い髪、同色の冷たい瞳。

凍矢と違ってたくましい体格だった。わが師のよき相棒だった彼。二人が並んでると綺麗だな・・・といつも思っていた。

子供心に彼らの強さや美しさ、器の大きさに憧れた。

彼らを失って随分経つても、この喪失感が未だ消えることは無い。例え、修羅となり自分の手が血に汚れた今でも。

凍矢は、何となく風を見ていて彼女の師がどんな人物だったのか分かる気がした。

「それに彼と、お前の師匠は懇意だね。・・私は、お前の師を幼い頃から知っていた。」

ああ、と思う。本当に遠い日々になってしまった。

こんなにもはつきり心の中に浮かんでくるのに。

師匠や氷連の後にいつもついてまわっていた・・笑う事を覚えたあの頃。

懐かしそうに風が言うのを見て、凍矢は胸が少しだけ痛む。

「・・すまない。」

低く、凍矢は言い放つ。

「俺が呪氷使いにならなければ、先代は死なずに済んだ。」

自分がここにいると言うことは先代が死んだ証だから。

ふと、彼女に初めて会った時の事が思い出される。

その時風は、自分に師の死に様を聞いてきた。

あの時には気付かなかったが、

自分の答えを聞いた彼女の目には確かに淋しさが宿っていたように思えた。

・・・相手がお前でなければ、誰に疎まれてもいいものを。

「・・・それは違う。」

風は少し声を大きくして否定した。

「彼はお前の事を自慢していた。・・満足していたと思う。」

「師匠が？」

「ああ。・・いなくなる前日、彼は私に会いに来た。・・その時に。」

「珍しい・・あなたが来ないとは。」

普段なら彼も来るであろう任務。けれど、打ち合わせの場に彼は来なかった。

「用がある。その任務はお前一人で十分だろう。」

「はい。」

「おい、待ちな。」

踵を返しかけた私の前に彼が立ち塞がった。

「？」

「弟子が・・もうすぐ一人前になる。」

この言葉を聞いた瞬間、心に穴が開いたような気がした。

「あれだけ・・。」

取る気は無いと言っていたのに、と言いかけて止める。

何故、あれほど拒んでいた弟子をとる気になったのか、考えて不安が胸をよぎった。

「いえ・・そうですか、長も喜んでいると思います。」

「だろうな。そうそう、歳はお前んところの陣と同じくらいだ。」

彼が一つ頷く。

「あいつは冷静で頭がいい。おまけに成長も早い。」

我ながら優秀な奴だと思ってるぞ。

俺はお前や珠南とは違って教える事は教えたが、何っーか・・・
気に入らない事にはうるさい奴だ。お前とは気が合うだろう。」

どこか誇らしげに言う。

「楽しみです。」

力ない笑みを氷連に返しているが、彼は私の今の気分を知っている
だろうか。

と、ふいに彼が自分の心中を察したのか苦笑する。

「・・お前という時間は気に入っていたが、俺もそろそろ駄目なよ
うだ。」

お前には黙っていたが・・もう数年前から発症しかけていたのに気
付いていた。

もうすぐ、腕が使い物にならなくなる。」

彼が、ぎゅっと拳を握る。

「そんな・・。」

風の顔色が変わる。

不安が的中したと思った。

・・・彼の様子がおかしいのには気付いていたけれど、恐くて目を背けていた。

この里を覆う森には時折特殊な霧が発生するのだが、

その霧は方向感覚を狂わせるだけでなく、それとは別の毒を含んでいた。

毒はかなり微弱なもので吸ってすぐどうなると言う訳ではないのだが、

それが原因でかかるこの土地特有の病があった。

徐々に筋肉、内臓組織が石のように硬くなってしまふ死の病。

長い潜伏期間があるが、一旦発症してしまつと後はじわじわと弱つて死ぬのみ。

だが、抵抗力の無い子供より何故か成体になつてから発症する方が多かつた。

多分、成体になるまでに毒が蓄積されるせいなのだろうが。

この里に連れて来られた時点で否応無く瘴気を吸い込んでしまつため、

ここにいるのが長ければそれだけ病の発症は早くなる。

発症して自由に動けなくなる前に、なるべく早い時期に弟子をとり、里を修行場として技を伝える・・・どうしようもない悪循環だった。

「それで、弟子をとつた・・・後悔したのはお前と同じだが、技を絶やすわけにもいかなからな。」

発症してからも個体によつて進行の度合いが違つし元々発症しないものもいる。

・・・彼はその内の一人だと思っていた。・・・思おうとしていた。「・・・俺は、進行がかなり遅い方だったようだ。」

多分、任務で里にいる時間が他の連中より少なかったせいだろう。」
氷連が、ふうつとため息をついて自分の拳を見つめる。

「できりゃあ、手を汚させるのも、こんな病気で死なせたくもねえ

がな・・・。

お前も、あいつも。情が移るってのは困ったもんだ。」
苦々しげに言う。

「・・・弟子の名は？」

「凍矢、だ。・・・じゃあな。」

氷連が背を向けて歩き始めた。

無意識のうちに手を伸ばしかけて・・・やめる。

「あなたの側にいるのが・・・当たり前だと思っていた。」

自分が言った言葉が聞こえたのか、彼の足がとまる。けれど、こちらを振り向かない。

「俺もだ、その事は忘れてくれるなよ。」

「・・・氷連を・・・恨んでいるか？」

「何故だ？」

「私の師匠もそうだったらしいが、お前の師はずっと弟子をとる事を拒んでいた。」

長に散々言われていたのに・・・本当に強情だった。」

「そうなのか？」

「そうさ。」

答えて、それから少し俯く。

「まともな奴は、弟子を取ることを拒むものなんだそうだ。・・・後悔するからな。」

魔忍が弟子をとる時は大抵襲撃先の赤ん坊や捨てられていた子供を拾った時だ。

当然そのままにしていれば飢えて死ぬだけの者達ばかりだ。

つまり赤ん坊や子供にも逃げ道は無いのだが、

里のための犠牲以外何者でもないから、と心の中で呟く。

（珠南の奴は、お前の手を汚させると悔やんでいた。今のお前と同じだ。）

氷連が皮肉げな笑みを浮かべて見てくる。

これを言われたのは、自分が陣を育て始めてからまもなくだ。

そう、自分のように弟子を大切だと思うようになってしまえば尚の事。

いつからかこの病の事は弟子に聞かせなくなった。

大抵のものは、発症する以前に死んでいく。

それは、力及ばず任務で果てたり弟子の手にかかる事を望むせいだ。もう一つは・・誰も口に出したがらなかったせい。

時が経つうちに<弟子はとらなくてはならない>

<奥義を託したら師は死ぬもの>と言う形で隠されていた。

けれど、目の前の凍矢に言うべき話では無い。

自分の弟子である陣にも言えない。

でも・・・

凧の表情が少し曇る。

「これはお前の師に言われた。・・そして私の師が言っていた言葉だそうだ。」

「だが弟子をとる事は掟のうちだろう、いずれはお前も俺も、とらなくてはいけない。」

現に、師匠達には凧や自分がいたのだから。

「そうだ。だが・・掟だからと言って割り切れないこともある。そのうち分かるさ・・。」

凧は苦笑した。

「・・俺は、先代に拾われなかったら死んでいた。感謝こそすれ、憎むことはない。」

凍矢の言葉を聞いて微笑む。

氷連・・彼の性格ではきつと表には出さなかっただろうが、大切にしていたのだろう。

そして凍矢も・・彼自身は気付いていないだろうが、本当はあまりに優しい修羅だ。

氷連が後悔した気持ちもよく分かる。

「そうか・・・そう言うものかな。」

ふと、先代の事を思い出す。

今でも自分は先代を恨んではない。

陣も・・・そう思ってくれるのだろうか。

「？」

話が上手くつながらないので凍矢は首を傾げた。

凧は、何を言いたかったのだろうか？

「また、変なことを言っすまなかつたな。・・・忘れてくれ。」

「ああ・・・」

自分から目を逸らした彼女がひどく儚く見え、奇妙な焦りを感じた。
不思議な感情がまたこみ上げてくる。

一体何なんだろうか。

何かを言おうと思った。

伝えたかった。

「凧。」

「何だ？」

「・・・任務で一緒になる時がまたあれば、その時は俺の後ろにいろ。
いや、任務以外でも俺がいれば側にいろ。」

その言葉を聞いて凧が驚いた顔をする。

無理も無い、忍にとつて後ろを取られることは死を意味する。

同じ修羅でさえ信用しない、後ろを見せないと言っるのが鉄則だった。

それは彼女に対しても同じ・・・

はずなのに、それを言っただけは不思議なほど頭に思い浮かばなかった。

「後ろ？・・・どうした、私はそんなに弱く見えるか？」

「違う。俺は・・・」

そんなつもりで言っただけでは無い。

けれど、言わなくては。

「何かあれば、俺が必ず・・・必ず・・・」

自分がそこまで言っただけで詰まっているのを見て、凧は目を細めた。

「分かった。．．だから、それ以上は言うな。」

再び言いかけた自分を制するように強い調子で凧が言った。

何故か、淋しそうな目をして自分を見る。

「そうか．．。なら、俺は行くぞ。」

彼女がそう言うのだから、自分の言いたいことは伝わったはず。

「ああ。．．ありがとう．．。」

凧が頷いたのを確認して凍矢は彼女に背を向けた。

「すまない．．。」

背を向けた瞬間、凧が小さくそう呟いたのが聞こえた気がした。

弟子がいるのだと聞かされたのはそれからたった数日後の事。

同時に彼女を見た最後の日だった。

霧にかすむ里（陣、凧、画魔、吏将）（前書き）

「OBLAAT」というサイトにある「Beyond the time」と言う小説の中で語られなかった部分（凧を追って姿を消した陣と、凍矢が再会するまでetc. . .）部分を創作しましたのでリンクしている部分が多々あります。

霧にかすむ里（陣、凧、画魔、吏将）

「凧、オレもう作ったぞ。先に食べるからな。」
陣が自分お手製の、

お世辞にも見た目は綺麗だと言い難い料理を美味しそうにほおばる。
反対側の、凧の座る椅子の前には、
少し大きめの茶碗が一つ水に満たされて置かれている。

「ああ、すぐ行く。」

呼ばれた女、凧も彼の前に座って用意された水を飲み込む。
これが、いつもの風景だ。

「凧はいつも水ばかり飲んでるだな。腹減らないのか？オレの食
うか？」

昔から、食事をする時に彼女は水だけを飲んでいる。

彼女の種族は水以外の食べ物が必要とせず、
呼吸すると同時に空気と熱で身体を保っており、
食べ物が必要としないのだと聞いた。

受け付けなくはないのだが、それでも特に求めたりはしない。
けれど彼女は、自分では食べずとも幼い頃の陣にはちゃんと食べさ
せていた。

大きくなってから不思議に思い誰から習ったのかと聞くと、
先代からだと教えてくれた。

自分自身は食べた事は無いが、
先代や他の連中が作っていたのを見よう見まねで作っていたのだと
か。

だが、彼女の料理は美味しかった。
けれど陣が多少の料理を覚えてからは彼女が調理場に立つ事は無く
なった。

「大丈夫だ。」

何年も前からの彼なりの気遣いに微笑む。

自分が水以外必要としない生き物だと言う事を聞かせてはいたのだが、

やはり今ひとつ違和感を拭えないのだろう。

魔界には様々な種族がいる。その種族が必要とする食べ物も千差万別だ。

「ごちそうさんつと。じゃ、片付けるからな。」

立ち上がった陣が手を差し出してくる。茶碗を渡せと言う催促だ。

水を飲み終え、手近にいた陣に碗を渡そうとした時、

手に痺れ・・・とも何とも言えない奇妙な感覚が起きた。

「あっ」

つるつと茶碗を落とす。

陣がすばやい動きでそれが床に叩きつけられる寸前で止めた。

「疲れてるのか？」

首をかしげて自分を覗き込んでくる。

彼は背が伸びた。もはや自分の背を追いつけている。

「大丈夫だ、すまない・・・」

小刻みに震える手を陣に見せないよう引つ込めた。

「でも・・・」

陣は、風が随分前から何かを隠していると感じていた。

そして、それがいい事ではないということも。

「いいから、心配するな。」

笑いかけると、

陣はまだ納得してないようだったが大人しく後片付けに入った。

血が・・・止まらない・・・

陣の後姿を見ながら腹を押さえる。

・・・この傷を受けたのはつい最近の事だった。

任務で戦った相手の中に手強い剣士がいたのだ。

自分ならばさほど苦戦せずに倒せる相手だったのに。

しかし自分は苦戦した。いつの間にか自分の身体が衰えていたのだ。息がすぐに切れ苦しくなり、

止めを刺すと同時に相手の剣で腹を貫かれかけて、
やっとその事に気付き驚いていた。

傷は浅くは無いものだった。

しかし自分たちは受けた傷は自然に塞がり後も残らない。

その傷は自然治癒できる十分な範囲のはずだった。だが・
と、傷口を押さえる手に力がこもる。

以前より傷口は塞がったものの、あと少しという所で塞がらない。
痛みは無いのだが、どんなに必死に抑えても、妖気を送っても、
薬草を練りこんでみても血が止まることはなかった。
塞いだと同時に開いてしまうのだ。

受けた傷が中々治らないのを見て更に確信した。

自分はこの里特有の、あの病に冒されている・・・。

徐々に筋肉、内臓組織が石のように硬くなってしまふ死の病。
長い潜伏期間があるが、

一旦発症してしまうと後はじわじわと弱って死ぬのみ。

最初に肺が冒され徐々に全身に広がっていくのだから、

ある程度進行してしまえばどこに傷を受けても致命傷に至る厄介な
病。

内臓が機能しなくなっていく影響か血液の凝固作用も衰えており、
この病に冒された箇所には傷を受けるともはや血が止まらなくなるの
だ。

おまけに自覚症状がこれでもかと言うぐらい無い。

貫かれかけた箇所から血がとろりと、

ごくごく微量だが憎らしいぐらいゆっくりと確実に流れ続けている。
見えなくても感じる。

さつき水を飲んだばかりなのに、

口がだんだんと渴くような感覚がするのを凧はどうする事も出来な
かった。

陣に奥義を託した後で良かった・・・と思う。

ふと、凧は自分たち住処の扉の向こうに一つの妖気を感じた。

長が使役している小妖怪の微弱な妖気・・・

これは長が自分を呼んでいる証拠だった。

大方この前の任務の件だろう。

この前の任務が、自分の衰弱速度から言って遂行できる最後のものだ。

後は陣に後を頼むのみなのだが・・・

「陣。」

「何だ？」

陣が振り返る。

「お呼びだから行ってくる。・・・あまり姿を見られないようにな。」

「分かってらい。」

陣は何故か不安そうに自分を見ていたが、

それに気づかないふりをして長の下へ向かう。

他の連中もその場に集まって来ていたが、凍矢はいない。

先程会って来た。彼はこれから任務に向かうのだと聞いた。

「凧。」

玉座の上で長が自分の名を呼ぶ。今まで伏せていた顔を上げた。

真っ直ぐで長い、薄い紫の髪と紫紺の瞳。

細面だが端正な顔。

そして額にある邪眼が目に入る。

長と言えば老人のようなイメージを持つ。

確かに長はこの里の中で誰よりも長い時を生きているが、

決して老人では無い。

たくましい身体は力をみなぎらせている。

「この度の任務の果たし方見事であったとか。」

さすがは今亡き先代の風使いの弟子、

この里でもそなたに敵う者はかつての呪氷使い氷連ぐらいのもの。

だが、氷連は死に、もはや修羅の中でお前に敵う者はいない。」

先代と氷連の事を出されると自分の胸は少なからず痛む。

「日々気を引き締めてかかれ。」

「はいっ」

「これからも尽力惜しむな。そうそう、任務だけではない。この私の命令ならば何でもこなすように。．．忘れるなよ。」

「．．．．．はい。」

「そう言えば、お前の自慢の愛弟子は息災か？」

「え？．．．は、はい．．．。」

どこでそんな事を．．。

凧はひそかに唇を噛んだ。

「陣、と言ったか。まだお前には及ばないが、大した風の使い手と聞く。」

一度ゆつくり会ってみたいものだ。」

「はっ．．．。」

だれが．．．だれがかわいい陣を貴様の元へなどよこすか。

「光栄でございます。」

彼女の普段より更に淡々とした様子を見て凧．．．。

と、「画魔は思わず心の中で呟く。

画魔は陣を知っている。凧がよく預けに来ていたからだ。そして彼女がいかに陣を大切にしているかも知っている。

弟子を大変可愛がっているお前の事だ、

相手が長でなければ黙ってはいないだろうな．．。

「そうだ、吏将。」

吏将と呼ばれた男が顔を上げる。

黒髪に黒い瞳、鼻が高すぎる事を除けば割合整った顔をしている。今では優秀な参謀役として修羅の連中をまとめている土使い。

「呪氷使いの事はどうなっている？」

凍矢に何か？と、凧は心の中で首を傾げる。

「はっ、あの呪氷使いには仰せの通り刺客を差し向けました。恐らく奴と同等．．以上の実力かと。」

凧は一瞬自分の耳を疑った。

「うむ。」

吏將の言葉を聞いて長が満足そうに頷いた。それから長から近々大規模な襲撃の計画が入るから心しておくように、

と簡単な説明があつたのだが、

もはや風の耳にはかすかにしか入ってこなかった。

「吏將。」

会議が終わった後、風は急いで吏將の後を追う。呼ばれた男が振り返った。

「何だ？」

「先程の話、本当か。」

「呪氷使いの事か？ふん、嘘を言っただうする。」

「何故だ、長は凍矢を疑っているのか？」

「長が言われた事だ、奴の実力を試したいと言っただ。」

「そうか。」

「何故、あいつにそんなに構うんだ？前々から思っていたが。」

「……。」

「俺にはよく分からんな。」

やれやれと言った様子で吏將が首を傾げた。

「……その場所は？」

「28層南西部113地点の村だ。今から行っても間に合うまいよ。」

吏將が吐き捨てる。と、次の瞬間彼の姿はその場に無かった。

しばらくその場で沈黙する。

「風じゃないか、どうしたんだ？」

聞きなれた声と、妖気がして風は振り返る。

すると思惑通りそこには画魔がいた。

「ああ。……少しな。」

「また陣の事か？相変わらず弟子思いな事で。本当に、親子みたいだ。」

画魔は、考え事をする凧の心の中を占めるのは、
いつでも弟子の事だと思っている。

「氷連にも言われたな。」

「凧・・・？」

画魔が突然怪訝そうな顔をした。

「何だ？」

「どうしたお前、血の匂いがする。」

さすがは化粧使い。

五感の鋭い他の忍より更に匂いに敏感なのは感心させられる。

「切られたからな、仕方ない。」

「おいっ」

凧の言葉を聞いた途端、画魔が声を荒げた。

「ちゃんと手当てをしたのか！？塞がってないぞ、一体いつから・・・。」

「無駄なんだ。」

一言だけぼそつと呟く。

「何がだ、たかが切り傷なんだろうっ！」

「・・・そうだ。」

画魔は病の事を知らないのだな・・・と、

凧は皮肉そうな視線を腹部に向ける。

「気をつける。」

何をどうやっても血を止めることがでないのだが・・・そう思って
苦笑する。

力の無い苦笑を。

「そうだ、お前にも言っておく。・・・陣が一人前になったんだ。」

「そうか・・・。」

画魔が少しだけ驚いた顔をする。

弟子が一人前になる。それが何を示すのか修羅の者なら誰でも分かる。

「もう、お前と会うこともあるまい。」

陣の事で世話になった・・・本当に、感謝しているよ。」

「・・・。」

「どうした？」

「いや・・・。」

最後に見たのは数年前だが、あれから大きくなっているんだろうな。

「

「ああ、とうに私の背を追い越している。」

「早くお目にかかりたいもんだ。もちろん長の前などではなく・・・な。」

「ありがとう・・・じゃあな。」

「ああ。」

次の瞬間風の姿は見渡す限り無かった。

彼女がそこにいた事を示すものは何も無い。

ただ、彼女がいた場所に風が小さい竜巻になっていて、

画魔が見ている前でやがて消えた。

どうすればいい・・・。

住处に戻ると風は椅子に座りため息をついた。

凍矢・・・

「風？どうした？」

陣が側に寄って来た。

「・・・何でもないよ。」

陣に心とは裏腹に笑いかける。

「前から、悩んでるみたいだ。」

「気のせいだ、大丈夫だよ。」

そう言っただけで立ち上がり、陣の視線から逃れるように外へ出ようとした。

・・・助けに行かなくては。

陣を任せると言ったのはついさっきなのに失う訳にはいかない。

「用がある。行かなくてはいけないから、留守を頼むよ。」

すると陣が突然前に回り込んで自分を抱きしめてきた。

「どうした。放せ、時間がなくなる・・・。」

だが、自分がいくら逃れようとしてもどうする事も出来ない。自分の力がこんなに衰えているのかと今更ながら驚愕した。

「凧は、オレが小さい時から変わらねえな。」

「？」

「あつたかくて優しくて、オラの事いつも心配してくれる。そんで、オレには何も聞かせてくれねえ。」

「陣・・・？」

「心配させるような事はなーんにも。」

でもな、オレもう子供じゃねえ。凧が何か悩んでるのも・・・身体弱ってきてんのも分かってんだ。」

「・・・放せ。」

凍矢が・・・。

「そんな身体でどこ行くだ？今の凧じゃ、もうオレの事倒せねえだろ？」

陣は、凧が用があるという時は戦いに行く時だと既に理解していた。陣とてこんな衰弱した彼女を戦いに向かわせて、

無事でいられるかが分からない訳ではない。

凧は言うまで解放してくれそうにないと思い、ため息をつく。

「・・・話を聞いてくれるか？」

「ああ。」

にこつと陣が笑う。

「28層南西部113地点の村に・・・」

そこに仲間が一人で行って苦戦しているだろうから・・・」

「分かった！んじゃ早速助けに・・・。」

「待て。」

「？」

「これは修羅としての仕事ではない。」

・・・私の、個人的な事だ。無理に従う必要は無いんだぞ？」

陣・・・行かせたら、もう二度と会えないだろう。そして修羅になる。

・・・させてしまう。行かせたくない。けれど、凍矢・

「何で？ 凧、そいつの事大事に思ってたんだろ？」

陣の胸にすぐるようにして寄りかかる。

「！？」

凧はそつと微笑んだ。

自分よりも大きい体。彼はもはや小さい子供ではないのだ。

「？ 気分悪いのか？・・・どうしただよ、凧・・・」

劣わる様に、そつと両方の肩に手を置かれる感触がした。

「大丈夫だ、オラすぐ戻って来るからな。早くしねえとそいつ危ねえんだろ？」

ぽんぽんと、軽く肩を叩かれる。

「そんなに心配するでねえよ、オレはもう強いだぞ。」
言いながら、優しく凧の背を撫でる。

「ああ。」

そうだ、私がお前を強くした・・・。

「もちろんその通りだ。」

顔を上げて陣の目を見る。

「・・・今日からお前は風使いを名乗っていい。」

「え？」

突然言われて、その顔に驚きの表情が浮かぶ。

「お前には、その資格が十分ある。」

笑ってやると陣の顔が輝いた。

「本当か！？ やったべ！」

言って、陣は凧をきつくきつく抱きしめる。

凧は、無邪気に喜んでいる陣を見て感情を堪えなければならなかった。

・・・決して嬉しい訳ではない。

「陣・・・」

「ん？」

「いや・・・そいつの名は呪氷使いの凍矢、だ。気をつけてな・・・」

「待つてくれ、絶対だぞ。」

ぱつと凧を放すと、ものすごいスピードで飛んでいった。凧は陣が飛んでいった方向をしばらく見つめると腹を押さえる。これで陣を見るのは最後だと言うのに・・・あつけないものだ。それから、もう帰ってすることも無い住処を見渡す。

一瞬、幼い自分に戻った気がした。

行かなければ・・・私の最後を迎える場所へ・・・

凧が選んだのは里の外がよく見える普段のお気に入りの小高い丘。いつも腰掛ける木の幹にすがりつくと、もうその場から動かなかった。

凧の体から流れる血が、服から魔界樹の幹を伝い、糸のような細い線になる。

そしてその線はゆっくりゆっくりと延びて行き、

やがて幹から土に吸い込まれるとどす黒いしみになった。少しずつ、少しずつそのしみは範囲を広げていく。

・・・どれぐらい時間が経ったのか。

妖気が一つ、近づいてくる気配がした。

「凧!!」

誰かが私をゆする。追手か。いや、通りすがりの者か。

・・・もうどっちでもいい。

ふと、ゆすられるまで何も考えられなかった自分に気付いてぞつとした。

「凧!起きろ!」

攻撃される気配は無い。けれど、ひどくゆすられる。だるいけれど目をあけた。

陣だった。

「・・・陣?」

「生きてるな?さ、帰るべ。」

明らかにほつとした様子で風の側に座り込んで、
そして自分に向かって手を差し出す。

「よく分かったな・・・」

風は苦笑した。

相変わらずだるさはあったがさつきほどは感じなくなった。

「分かるだよ、風に聞いたらすぐ教えてくれた・・・
早く戻るべ？オラ、ちゃんと凍矢助けられただ。」

陣が来て驚いたのと、

凍矢が無事だったのを知ったのとでまた少し意識がはっきりしてきた。

陣の手が更に差し出される。

「そうか・・・ありがとう。」

風は笑んだ。しかし、差し出されたその手を握る事は出来なかった。
・・・もう、腕があまり動かないのだ。

「凍矢の奴が、風は死んだって言うから驚いただよ。」

風に手を取る意思のなかったことが分かって、

今度は風の体に腕を回して立たせようとする。

そしてそつと手を離すのだが、意に反して風は地面に膝をついてしまった。

「風、立つべ。かかえてなんかやらない。置いてくぞ！」

そういつつも一度陣が手を伸ばしかけた時、

ふいに自分の腕についた染みが目に止まった。

「あれ？血・・・？」

陣の腕についた赤黒いその染みは、風の腹に手を回した際ついたものだった。

ハッとしてみると風の腹部に乾きかけて茶色くなった血と、
まだかすかに赤い血が服についているのが分かった。

「怪我してたのか？ならオレが・・・」

「無駄だ。」

「あれ？どうして・・・」

いくら陣が妖気を送っても、

送っている側からジワジワと染み出してきて少しずつ服を濡らして行く。

「なら里に帰れば治してくれるだ・・帰るべ？」

そう言いながら陣の声音が弱くなる。自分たちは、受けた傷などすぐ塞がる。

放っておいても自然に塞がるはずなのに。それほど重い傷とも思えないのに。

凧が、こんな傷を放っておくはずはない。

何故？それは、放置するしか仕方が無いと言う事では？

では、いつから、いつから凧の血は流れ続けていたのか。

一体今日までにどれほどの血を失っていたのか。

「もう気付いてるだろう、私は長くない。」

・・だから、凍矢を助けるのも自分では行かなかった・・・

いや行けなかったのだ。」

凧の足は、もう自分の体重すら支えれない。

「早く里に戻れ。・・そして二度とここへ来るな。」

黙って抜け出してきただろう？」

確か、近々大規模な襲撃になるであろう依頼が来ていたはず。

「今頃は次の任務の事で会議を開いているに違いない。」

それに参加しなかったら里の連中ににらまれるぞ。」

「気にしねえ。」

「戻れ。」

「嫌だ！」

自分の側を離れようとしないうちに陣を見て、歪んだ笑みをその顔に浮かべる。

私を哀れんでいるのか？お前の人生を狂わせた張本人である私を・・

・
「丁度いい機会だ、お前に話したい事がある。」

本当は黙っていたほうがお前のためだったのだろうかな。」

それで、この里の為に働く事をお前が拒んでもどこかで・・・お前がそうしてくれるのを願っていたのかもしれない。

「お前を拾ったと言っていたが・・・お前の本当の両親を殺したのはこの私。」

「え・・・。」

「お前の種族を襲撃するよう命令を受けてな。」

仲間と共に手当たり次第に殺した・・・」

「でも・・・そんなら風がオラの父ちゃんや母ちゃんを殺したって決めねえだろ？」

風が声を荒げる。

「私か、仲間か。そんな事はどうでもいい。」

お前の両親や一族が殺された事に変わりはないだろうが？」

「んなら、何でその時オレを殺さなかった？」

そう言われて風は小さく詰まる。

「・・・殺すつもりだったさ。」

「でも、風はオレを育ててくれただろ？」

「確かにお前を育てた、それは認める。」

「・・・修羅の・・・風使いの後継者が欲しかったから・・・。」

「ふうん、でもあんなに優しくしてくれたべ、

風がそう言ってもオレは風を憎む事は出来ねえ。」

「・・・。」

「あゝあ、そんな話聞いちまうと修羅になるの嫌だべ。」

風はそれを聞いて顔を両手で覆った。

「・・・陣のその言葉が無性に嬉しかったのだ。」

「・・・お前には私を殺す権利がある。私を殺せ。そして忘れろ。だが、ここで喜びを表すわけにはいかない。」

「何が？知らないべ！そんなの。死にたければ自分でやれ。」

分かっている、彼女にはもうその力すらない。

「ふふっ・・・。」

不意に凧が笑ったので陣はきょとんとして凧を見る。

「陣・・・すまなかった。」

さっきのゾツとするような口調とは打って変わって、いつもの穏やかな凧の口調と表情に戻った。

「側に来てくれ、お前の顔をよく見せてくれないか？

死ぬならお前の側で死にたい。」

陣は黙って素直に凧を抱きしめ、

さっきまで凧すがっていた木の根元に腰を下ろす。

「凧・・・オレ知ってた。オレの事・・・何回か殺そうとしただろ？」

まさか。気付いていたのか？

「・・・それを知っていたなら何故・・・。」

変わらずに側にいた？

「凧が好きだから。」

陣があっけらかんと言いつつ。

「馬鹿な事を。」

「・・・凧が好きだ、本当に・・・大好きだ。」

もどかしい。これしか言えない。

「・・・凧の事なら何でも・・・全部・・・」

凧は目を閉じて言う。

「このまま独りで死んでいく・・・そう思っていたらお前が来てくれた。」

「・・・嬉しかったぞ。」

「凧・・・。」

「すまない。」

凧はやつと言葉を出した。

「お前の母親は、最後の瞬間私にお前を託した。

顔は・・・お前によく似てる。」

「え？」

「彼女は元々かなりの深手を負っていて、見つけてすぐ絶命してし

まった。

・・・とても美しい鬼だった。

お前も彼女に似て美しい鬼になるんだろう。見れないのが残念だ。」

「風？」

「凍矢も・・・会いたかった、無念だ・・・。」

お前とは、ろくに別れの挨拶すら出来なかった。そう言うものだけ
れど。

「どうか自由に・・・」

幸せになってくれ・・・と付け足したつもりだが、それが声になっ
たのか。

すぐに風の手は落ち妖気が完全に消え、

今や風の身体は完全に重力に身を預けている。

「風・・・。」

眩き、その穏やかな表情を見つめた。

改めてみると元から細い体がさらに痩せてしまっている。

苦しかったか？

埋めようと穴を掘りかけて・・・止める。

埋めるのはだめだ、可哀想だ。

このまま手元に・・・と言葉が浮かんで来る。

だが、すぐその考えを振り払った。

彼女は風だ、風は何者にも縛られない・・・縛る事は出来ない。

だから土に・・・自然に戻ったほうが幸せなのに違いない。

彼女に土をかぶせている間、

ともすれば先ほどの声に片寄りそうになるのを必死で押さえつつ、
やっと作業を終えたのはそれからかなり時間が経ってからだった。

小さい頃は彼女が少しでもいなくなると淋しくて悲しくて泣いてい
た。

そしてもう、彼女は永久に自分の前に帰ってくる事は無い。

分かっているのに涙が出ない。無意識にその場に座り込んだ。

愛しいあなたへ（陣&凍矢&凧&画魔）（前書き）

久しぶりに、魔忍の里へやって来た陣と凍矢。そこで出会ったのは
…。

愛しいあなたへ（陣&凍矢&凧&画魔）

もはや修羅ではなくなった陣と凍矢だが、
今は亡き先代や友人の墓参りをしようとかつて自分達が生活、
修行した場所にやって来た。

だがそこで二人が目にしたものは、
証拠隠滅のため主たるものは全て焼き払われていた里。
至る所に若木が生えており、そのほかの場所は緑の草原と化してい
る。

ここもじきに魔界の森の一部となるのだろう。
そんな中で墓地だけは多少雑草や蔓が覆っていたものの、
相変わらず原型を留めていた。
ふいに。

とてつもなく眠くなってきた。

「な〜んか眠いな。ちよつと昼寝でもすっべか。」
陣がごろんと横になる。

「おい、陣・・・。」

「とーやも寝るべ、気持ちいいだぞ〜！」
「ふふっ分かった。」

軽く笑んで凍矢も寝転がる。

こんな事をするのは久し振りだった。

そして二人は黙ったまま魔界の暗い空を見る。

人間界とはあまりに違う真っ暗な空。

じつと見ていると暗い空が覆いかぶさってくるような錯覚に陥る。
眠い。

確かに眠い。

それに風が・・・とても心地いい・・・
目を閉じてみた。

どのくらい時間がたったのか。

それとも一瞬だったのか。

「風が歌ってるべ・・・？」

陣が辺りを見回して不思議そうに言う。

「あ、俺ら来るのに夢中で花忘れてただな、ちょっとその辺行ってくるだ！」

陣が飛び立とうとした瞬間、

かなりの突風が二人の間をすり抜けたので二人とも目を閉じた。

「ビツクリしただな」。じゃ、行ってくる！」

「ああ、気をつけろよ。」

再び飛び立つ陣を見送った凍矢だが

何気なく墓石があった方に目をやった瞬間動きが止まった。

何だこれは？

目の前には暗黒武術大会で死んだはずの画魔の姿が。

「元気そうだな。」

そう言つてキョトンとした凍矢の様子を面白そうに見ている。

「画魔？お前どうして・・・。」

「それよりお前一人か？何しに来たんだ？」

「何つてお前たちの・・・。」

墓参りに、と言おうとした時画魔が口を挟む。

「大会はどうなった？」

それを聞いた凍矢の顔が少し沈む。

「すまない・・・。」

突然の台詞に画魔は困惑した表情をする。

が、凍矢の表情で大体の事を悟ったらしい。

「・・・負けたのか。」

声を落として言う。

「・・・ああ・・・。」

凍矢は画魔の顔をまともに見ることが出来ず、一瞬視線をそらす
すぐ元に戻した。

「ずっとお前に謝りたかった、
俺はあの時お前が命を失ってまで作った時間を無駄にした。
悔やんでも悔やみきれん・・・。」

凍矢が、苦痛を顔に露にして言おうとするので画魔は優しく肩を叩く。

「もう俺には関係の無い事だ。・・・変な事を聞いてすまなかったな、
我らの夢は実現できなかったのか。」

「それが違うんだ画魔、俺達はもうく修羅くじゃなくなった。

修羅はもう存在しない・・・今は陣と共に浦飯や蔵馬達と同じ、
表の世界で生きている。」

「本当か？敵だっただろう？」

画魔は心底驚いた、と言う表情を浮かべている。

凍矢は画魔に「暗黒武術大会」から今の魔界に至る経過を簡単に話した。

するとそれを聞いた画魔が苦笑する。

「そうか・・・お前達は結局望むものを手に入れたのだな、ならば俺も満足だ。」

そして少しだけ声を落として言う。

「・・・だが、出来ればお前達と生きたかった・・・それだけが未練だ。」

「俺もだ。・・・だが画魔、お前には感謝している。俺は生涯忘れは
しない・・・。」

「よせよ。」

画魔が優しく笑う。

「見な、いい事がやって来るぞ。」

そう言って凍矢の後ろを指差す。

「？」

「とーやー！これ墓に供えるべ！」

画魔が指差した方を向く前に、陣が花を手にいっぱい持って凍矢の側に降りて来る、

「陣、画魔が・・・」

「ん？画魔がどうかしただ・・・か？」

突然陣が棒立ちになり、手に持った花が地面にぼろぼろと落ちた。

「どうした？」

凍矢は陣が見ている方向を向き、啞然とした。

二人の視線の先には陣の師匠であり凍矢が焦がれていなかった人物、

凧が二人から少し離れた所に微笑を浮かべ立っていたから。それも、生前と変わらず美しいままで。

さつき画魔が指差した方向だと思い画魔がいた方を向くが、今までいたはずの画魔がどこにも見当たらなかった。

「凧・・・！！」

陣が花を投げ捨てて何のためらいもなく彼女に抱きついた。

彼女が幻なら陣を受け止める事は出来ないはずなのに、

彼女は陣を優しく受け止める。

陣が信じられないと言うように彼女から一旦離れ、まじまじと凧を見た。

「久しいな、陣。ん？私、何か変？」

懐かしい声が響いてくる。

「何でも無い！凧・・・会いたかっただ・・・」

陣が首を激しく振り、再び彼女を抱きしめる。

彼女は笑いながら手を伸ばし、陣の髪をなでながら言う。

「私もだ、陣。それと・・・」

凍矢のほうを向いた。

「凍矢。」

「凧・・・。」

凍矢はつぶやいて、用心深く凧に近づく。

これは一体・・・お前も画魔も死んだはずだ。

「強くなつたなお前達・・・」

凧が感心したように二人を代わる代わる見て言う。

「まーな。でも早く凧に追いつきたい！」

「ふふっ・・・お前ならすぐ私なぞ追い抜くだろうよ。」

凧は軽く笑って自分の方に視線を向けてきた。

相変わらず母のような優しい、穏やかな視線を。

これは凧ではない。

そう思いつつも、凍矢の心の中に懐かしい想いが甦った。

「凧、俺達はもう修羅じゃなくなつたんだ。」

「本当か？」

凧は驚いた表情を浮かべている。

「そうだべー！」

陣が割り込んだ。

「人間界におりたり自由に出来る様になつただよ、仲間もいっぱい出来た。」

「・・・？」

陣と凍矢は凧に「暗黒武術大会」から今までに至る経過を話した。

凧は二人の話を聞いて、美しい顔にこれ以上ないというほどの笑みを浮かべる。

「魔界も、いや・・・随分色々な事が変わったんだな・・・そうか、これでやっと・・・」

凧が嬉しそうに呟く。

「随分と懐かれたものだな、凧。」

凧の背後から男の声がして。

凧しか見ていなかった二人がそちらに顔を向けた。

と、そこには端正な顔だが刺すような冴え冴えとした青い髪と目と雰囲気を持ち、

見るからに猛々しい大柄な男が立っていた。

「氷連・・・」

凧がちらりと笑って呟き、声の主に振り返った。

凍矢は啞然として現れた男を見つめる。

「凍矢、久しいな。元気そうで嬉しいぞ。」

「師匠？」

凍矢が目丸くする。

「凍矢のお師匠様！？わゝ、強そうだべ〜！」

氷連が一瞬陣に目をやり、凧の方を向く。

「ひょっとしてお前の陣か？」

「はい。」

凧の答えを聞き、氷連が少し目を見開く。

「ほう、あのちびが・・・随分大きくなつたものだ。」

感心したように言う。

「？オレはおっさん知らないべ？」

「そりやそうだ、俺がお前を最後に見たときはまだ小さい・・・甘えん坊の子鬼だった。」

氷連は顔に？マークを浮かべている陣に向かって笑い、凍矢に向き直った。

「師匠、俺はもう修羅じゃない。・・・闇の世界で生きる事はしない。育ててくれたあんたには悪いが・・・」

凍矢の言葉を聞いて氷連が目細めた。

「ふ、何故わざわざ俺に言う必要がある？お前がそう望んだんだろ？」

氷連は凍矢の肩を軽くたたく。

「それを望むよう導いてくれたのは・・・師匠、あなただ。そして凧も。」

「そうでなければ俺はく修羅に疑問を持つ事は無かった。」

そして、光を望む事自体無かつただろう。

「時々、何故『あの頃が今じゃないのか』と思うことがある。そうすれば・・・」

師匠も、凧も画魔も、掟の犠牲にならず別の生き方が出来ていたかもしれないのに。

氷連が皆まで言わせず静かに言う。

「凍矢。今更こんな事を言うのもなんだが俺はお前を不幸にしたかった訳じゃねえ。」

だが戦いの道具となる事が分かっていながらお前を拾い、修羅にしたのは俺だ。

お前には俺を憎む権利がある。」

「！そんなことは・・あんたに拾われて無かったら俺は死んでいた。感謝こそすれ、憎む事はない。」

「そう言ってくれるなら安らぐ。だが、あの頃はああ言う生き方をするしかなかった。

それは分かるな？

俺はあの頃なりに満足していた、だから気に病むのはやめろ。いいな？」

「・・ああ。」

「やはりお前は俺の弟子だ、自慢に思ってるぞ。」

「はい。」

「凧、氷連。」

また違った声がした。

「珠南さま？」

「珠南か。」

陣と凍矢が振り返ったところには氷連までとは行かないがやはり背の高い、

たくましい体つきの一人の男が立っていた。

かすかに風になびく程度に伸ばした闇そのもののような黒い髪と、

黒曜石のような瞳と牡牛のような角をはやしており、

どこか神秘的な雰囲気を持っている。

「誰だべ??？」

「さあ・・。」

凍矢も困惑する。

「私の師匠だよ。」

凧が二人に向かって言う。

珠南が近づいてきて陣を興味深げに見た。

「こいつが凧の選んだ弟子か。．．なるほどいい風を持っている。」
珠南が陣を優しく見つめる。

「オレ陣だ。凧から師匠さんの事いつも聞いてただよ。」

そう言つて珠南を感じたように見つめた。

「へえ、何だか凧と風の感じが似てるだな。すっげ強そうだ！」

「そう言つてもらえるとは光栄だ。で？お前は．．？」

凍矢の方を向く。

「凍矢、だ。俺の弟子の。」

「お前が弟子をとる気になるとは．．どう言う風の吹き回しだ？」

「．．．。」

氷連が珠南から視線をそらし、苦虫を噛み潰したような表情をしている。

「二人ともよい目をしている、もう闇に生きるもの特有の影はないな。」

「．．どうやら俺の夢は現実になつたらしい。」

珠南が陣と凍矢を優しく見つめた後、ふと遠い方向を見る。

「風が呼んでいる．．」

氷連と凧がはつとしたように珠南を見た。

「凍矢．．そして陣、元気だな。」

氷連が凍矢の頭を撫で、どこか後ろ髪を引かれる様子で言う。

「待つてくれ師匠、俺は最後まで．．」

言いかけた凍矢を氷連が制し、首を横に振った。

凍矢は押し黙る。

またか、またなのか．．。

最後まで一緒にいたいと、そう．．

「ありがとうよ。」

氷連の言葉を聞いた瞬間、

凍矢は師が自分の言いたかつた言葉を全て理解していたのだと感じ

た。

「二人とも、もっと話してたいが・・・仕方ない。」
と珠南。

「え？師匠さんも？」

「時間が無いのだ・・・。」

珠南は優しく陣の肩をたたき、氷連と共に陣と凍矢から少し離れた。
「なあ凧、凧はずっと一緒にいられるな？」

陣の必死な言葉を聞いたとたん、凧の顔に苦いものが走る。

「それは・・・すまない・・・。」

凧が淋しそうに言う。

「何で！」

陣が凧の両肩をつかみ、憂いを含んだ凧の目を必死に見つめる

「だって凧はここにいるじゃねーか！」

「許してくれ、私はもう既に・・・。」

苦しそうに凧が何かを言いかけた瞬間、凍矢が割り込んだ。

「お前が何であれ関係ない。」

「凍矢・・・。」

「掟だったとは言え、あんな別れ方はもう二度とごめんだ。」

こんな事を言っても叶わないとどこかで感じている。だが・・・

「側にいてほしい。・・・もちろんお前が望めば、だが。」

「私は・・・。」

凍矢は凧が再び何かを言いかけるのを無視して言う。

「いてくれるなら、もう、お前の側を離れない。」

それを聞いて凧は目を閉じた。

「私は・・・お前達にもう何もしてあげられない・・・。」

凧が淋しそうに言い、スツと陣の両腕から逃れた。

それから楽しそうに笑い、二人に向かい切ないほど優しい視線を向けた。

「お前達を愛している・・・どうか自由に・・・。」

凧のその言葉が終わるか終わらないかのうちに突風が陣と凍矢をあ

おったので、

思わず二人は目を閉じる。

「幸せになって・・・」

二人の耳に、かすかにそんな言葉が聞こえた気がした。

すぐ目を開けて凧や師匠達がいた方を見るとそこには誰も立っていない。

「凧・・・？」

凍矢がつぶやいた。

はっとして周りを見ると、

自分たちはまったく動いておらずその場に寝転んだままだった。

そしてふと、自分達の間を抜けて行く風の中に、

キラキラ光る粉のようなものが含まれていたのに気付く。

すぐにそれは風と共に去ったのだけれど。

「夢幻花か・・・」

凍矢がつぶやいた。

その花粉は記憶を消す事が出来るが、同時に自らが望む幻を見せる事もある。

凍矢は苦笑して、墓地の所々に点々と咲いている小さくも美しい白い花を見る。

さっきの風で花粉が運ばれたのか・・・

そんな事を考えていると陣が突然ガバツとものすごい勢いで起き上がった。

「とーや！凧達が消えただ！早く探して・・・」

陣が大パニックに陥っている。

「落ち着け、陣・・・夢だ。俺達二人が望んだから見えたんだ。」

「夢・・・？」

陣ががっくりと肩を落とした。

「ここを見る、俺も気付かなかった。」

そう言って夢幻花を指差す。

「夢幻花？・・・そうだったか。」

陣も全てを了解したようだった。

『風は、一度愛したものから決して離れはしないもののよ．．．
陣の耳に、かつての風の言葉が甦る。』

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2240f/>

ある幽白FFに影響されて

2010年10月10日17時40分発行